

「獄中のバプテスマのヨハネ(1)」

§ 057 マタ 11 : 2~19、ルカ 7 : 18~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスのメシア性を示す2つの奇跡

* 百人隊長のしもべの癒し (§ 55)

* やもめの息子の蘇生 (§ 56)

② ヨハネの弟子たちが、2番目の奇跡をイエスに知らせた。

③ そこでヨハネは弟子たちをイエスのもとに派遣し、質問をした。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

バプテスマのヨハネからのメッセージとイエスの賞賛のことば (§ 57)

2. アウトライン

(1) ヨハネからの質問 (2~3 節)

(2) イエスの答え (4~6 節)

(3) イエスによるヨハネの評価 (7~15 節)

(4) イエスによる「この時代」の評価 (16~19 節)

(今回は、(1) と (2) を取り上げる)

3. 結論：現代的適用

(1) 信仰の危機について

このメッセージは、バプテスマのヨハネの働きの意義について学ぼうとするものである。

I. ヨハネからの質問 (2~3 節)

1. 2 節

「さて、獄中でキリストのみわざについて聞いたヨハネは、その弟子たちに託して、」

(1) 当時ヨハネは、マカイロスの砦に幽閉されていた。

① この砦はヘロデ大王が建設したものである。

② 死海の北端から約 15 キロ東側に入った所にある。

③ イエスの時代のペレヤの南端に位置する。

(2) ヨハネの投獄について

「獄中のバプテスマのヨハネ(1)」

①投獄されたという事実は、すでにマタ4:12で紹介されていた。

②投獄の理由は、マタ14:3~4で解説される。

「実は、このヘロデは、自分の兄弟ピリポの妻ヘロデヤのことで、ヨハネを捕らえて縛り、牢に入れたのであった。それは、ヨハネが彼に、『あなたが彼女をめとるのは不法です』と言い張ったからである」(マタ14:3~4)

③結局ヨハネは、この牢獄で斬首されることになる。

(3) KJVでは、2人の弟子たちとなっている。

①2つの写本にそう記されている。

②弟子たちは、ペレヤを北上し、ガリラヤ地方に入ったのであろう。

③当時イエスは、ナイン近辺にいた。

2. 3節

「イエスにこう言い送った。『おいでになるはずの方は、あなたですか。それとも、私たちは別の方を待つべきでしょうか』」

(1) ヨハネが弟子たちを送った理由

①イエスは、汚れに触れている。

②ユダヤ人の指導者たちは、イエスを拒否している。

③民衆も、イエスをメシアとして受け入れる段階には至っていない。

④それにしても、自分はどのようにして獄中にいるのか。

(2) 「おいでになるはずの方」とは、メシア称号である。

①詩40:7

「その時わたしは言った、『見よ、わたしはまいります。書の巻に、わたしのためにしるされています』(口語訳)

②詩118:26

「【主】の御名によって来る人に、祝福があるように。私たちは【主】の家から、あなたがたを祝福した」

③マコ11:9~10

「そして、前を行く者も、あとに従う者も、叫んでいた。『ホサナ。祝福あれ。主の御名によって来られる方に。祝福あれ。いま来た、われらの父ダビデの国に。ホサナ。いと高き所に』」

④ルカ13:35

「見なさい。あなたがたの家は荒れ果てたままに残される。わたしはあなたがたに言います。『祝福あれ。主の御名によって来られる方に』とあなたがたの言うと

きに来るまでは、あなたがたは決してわたしを見ることはできません」

(3) 獄中にあるヨハネの信仰が、一時的に揺らいでいる。

- ① イエスはメシアなのか。
- ② あるいは別の人物が登場するのか。
- ③ イエスからの確証が欲しい。

II. イエスの答え(4~6節)

1. 4~5節

「イエスは答えて、彼らに言われた。『あなたがたは行って、自分たちの聞いたり見たりしていることをヨハネに報告しなさい。目の見えない者が見、足のなえた者が歩き、ツァラアトに冒された者がきよめられ、耳の聞こえない者が聞き、死人が生き返り、貧しい者たちに福音が宣べ伝えられている』

(1) ヨハネに報告する内容

- ① 聞いていること
- ② 見ていること

(2) 見ていること

- ① 盲人の癒し
- ② 足のなえた者の癒し
- ③ ツァラアトの癒し

*これは、メシア的奇跡である。

- ④ 耳の聞こえない者の癒し

*耳の聞こえない人からの悪霊の追い出しは、メシア的奇跡である。

- ⑤ 死者の蘇生

(3) 聞いていること

- ① 貧しい者たちに福音が語られている。
- ② 宗教的指導者たちは、貴族や金持ちに関心を向けた。
- ③ イエスは、貧しい者たちに福音を語った。

(4) 旧約聖書のメシア預言

- ① イザ 35 : 5~6

「そのとき、目の見えない者の目は開き、耳の聞こえない者の耳はあく。そのと

き、足のなえた者は鹿のようにとびはね、口のきけない者の舌は喜び歌う。荒野に水がわき出し、荒地に川が流れるからだ」

②イザ61:1

「神である主の霊が、わたしの上にある。【主】はわたしに油をそそぎ、貧しい者に良い知らせを伝え、心の傷ついた者をいやすために、わたしを遣わされた。捕らわれ人には解放を、囚人には釈放を告げ、」

*この聖句は、イエスがナザレの会堂で引用したものである。

(5) 今は、恵みの時である。

①メシアによる裁きは確実にあるが、それは千年王国が成就する直前のこと。

2. 6節

「だれでもわたしにつまずかない者は幸いです」

(1) もし普通の人がこの言葉を口にしたなら、その人は傲慢である。

①このことばは、イエスのメシア宣言である。

(2) このことばは、ヨハネへの叱責ではない。

①当時の人たちが抱いていたメシア像は、勝利の王としてのそれである。

②ヨハネもまた、同様のメシア像を持っていた。

③それゆえ、自分が解放されないことへの疑問があった。

④しかし、イエスは「しもべとしてのメシア像」を示された。

3. 次回の学び

(1) イエスは群衆に向かって話し始める。

①群衆の誤解を解くためである。

(2) イエスのメッセージの内容

①イエスによるヨハネの評価(7～15節)

②イエスによる「この時代」の評価(16～19節)

結論：信仰の危機について

1. アブラハムの場合

(1) エジプトに下った(創12:10～20)。

①妻サライを妹だと言い、パロに奪われそうになった。

(2) 自分の期待と現実の間にギャップがあった。

2. モーゼの場合

(1) 岩を2度打った(民20:2~12)。

①これは、不信仰の罪、神のことばへの冒瀆である。

②それゆえ、モーゼとアロンは、約束の地に入ることができなくなった。

(2) モーゼは自分の感情をコントロールできなくなっていた。

3. ダビデの場合

(1) 姦淫と殺人の罪を犯した(2サム11章)。

①ダビデ契約(無条件契約)のゆえに、王座からは追われなかった。

(2) 成功者の傲慢と油断であろう。

4. エリヤの場合

(1) 自殺願望を持った(1列19章)。

①カルメル山での大勝利の後、イゼベルの脅かしに恐れを感じた。

(2) 燃え尽き症候群であろう。

5. バプテスマのヨハネの場合

(1) 獄中で信仰の揺れを覚えた。

①イエスのメッセージ中に、ヨハネを叱責することばはない。

(2) 自分の期待と現実の間にギャップがあった。

6. 普遍的要素

(1) 信仰の揺れは、すべての聖徒たちが通過する体験である。

(2) 一時的に信仰が後退することと、永遠に不信仰であることとは別問題である。

(3) 上記5人の信仰者たちは、すべて信仰を全うして死んでいった。

(4) 信仰回復に必要な要素

①悔い改めの告白

②みことばによる確証

③「かすかな細い声」を聞き分けること

(例話) 説教の授業。大声で語るメッセージへの戒め。

「獄中のバプテスマのヨハネ(2)」

§ 057 マタ 11:2~19、ルカ 7:18~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① イエスのメシア性を示す2つの奇跡

* 百人隊長のしもべの癒し (§ 55)

* やもめの息子の蘇生 (§ 56)

② ヨハネの弟子たちが、2番目の奇跡をヨハネに知らせた。

③ そこでヨハネは弟子たちをイエスのもとに派遣し、質問をした。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

バプテスマのヨハネからのメッセージとイエスの賞賛のことば (§ 57)

2. アウトライン

(1) ヨハネからの質問 (2~3 節)

(2) イエスの答え (4~6 節)

(3) イエスによるヨハネの評価 (7~15 節)

(4) イエスによる「この時代」の評価 (16~19 節)

(今回は、(3) と (4) を取り上げる)

3. 結論：現代的適用

(1) 教会時代の祝福について

(2) 終末への希望について

このメッセージは、バプテスマのヨハネの働きの意義について学ぼうとするものである。

Ⅲ. イエスによるヨハネの評価 (7~15 節)

1. イエスは群衆に向かって話し始めた。

(1) 彼らの多くが、荒野に出て行ってヨハネから洗礼を受けていた。

① ヨハネの影響力は非常に大きかった。

(2) ヨハネはイエスのメシア性を拒否したという誤解が生じる危険性があった。

2. 7～11節

「この人たちが行ってしまうと、イエスは、ヨハネについて群衆に話された。『あなたがたは、何を見に荒野に出て行ったのですか。風に揺れる葦ですか。でなかったら、何を見に行ったのですか。柔らかい着物を着た人ですか。柔らかい着物を着た人なら王の宮殿にいます。でなかったら、なぜ行ったのですか。預言者を見るためですか。そのとおり。だが、わたしが言いましょう。預言者よりもすぐれた者をです。この人こそ、『見よ、わたしは使いをあなたの前に遣わし、あなたの道を、あなたの前に備えさせよう』と書かれているその人です』。まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりもすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です」

*ヨハネに関して5つのことが語られる。

(1) ヨハネは、風に揺れる葦ではない。

- ①信念の人。確信をもって語っている人。
- ②時代の風潮、人々の意見、権威などによって立場を変える人ではない。

(2) ヨハネは、柔らかい着物を着た人ではない。

- ①裕福な生活に慣れ、ぬくぬくと暮らしている人。
- ②宮廷にはそのような人がたくさんいた。
- ③ヨハネは、エリヤのような風貌で荒野に住んでいた。

(3) ヨハネは、預言者である。

- ①旧約聖書の系譜に属する預言者である。
- ②預言者としての召しは、苦難へのそれである。
- ③例外は、ダビデの時代の宮廷預言者：ナタン、ガド。
- ④アハブ王(北王国)の時代、エリヤや他の預言者たちは、迫害に会った。
- ⑤荒野での生活は、預言者としての召しを象徴している。

(4) ヨハネは、預言者よりもすぐれた者、メシアの先駆者である。

- ①旧約時代の預言者たちは、メシアの来臨を預言した。
- ②ヨハネは旧約時代最後の預言者として、メシアが誰であることを示した。
- ③これは大いなる特権である。
- ④イエスは、マラ3:1を引用された。

『見よ。わたしは、わたしの使者を遣わす。彼はわたしの前に道を整える。あなたがたが尋ね求めている主が、突然、その神殿に来る。あなたがたが望んでいる

契約の使者が、見よ、来ている』と万軍の【主】は仰せられる」(マラ3:1)

*先駆者の登場

*メシアの到来

(5) ヨハネは、女から生まれた者の中で最も優れている。

①旧約聖書の聖徒の中で最も優れている。

②バプテスマのヨハネに関する資料が不足している。

*ヨハネの使命は、メシアの素晴らしさを指し示すこと。

③しかし、ヨハネの影響力は大きかった。

*使19:1~7には、ヨハネの弟子たち12人が登場する。

*今でもマンダイズムという一派がイラク南部に存在する。

・その信者は約6万人で、マンディーンという。

・アラム語の「マンダ」はギリシア語の「グノーシス」(知識)である。

・アダム、アベル、セツ、エノシュ、ノア、シエム、アラムを敬う。

・特に、バプテスマのヨハネを敬う。

・アブラハム、モーセ、ナザレのイエスは拒否する。

④天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大である。

*新約時代の聖徒のこと。

3. 12~15節

「バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています。そして、激しく攻める者たちがそれを奪い取っています。ヨハネに至るまで、すべての預言者たちと律法とが預言をしたのです。あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこの人こそ、きたるべきエリヤなのです。耳のある者は聞きなさい」

(1) 「ヨハネに至るまで、すべての預言者たちと律法とが預言をしたのです」

①ヨハネは旧約時代の預言者の最後である。

②預言者たちは、天の御国の到来を預言した。

(2) 「バプテスマのヨハネの日以来今日まで、天の御国は激しく攻められています」

①パリサイ人やサドカイ人は、天の御国の進展を激しく妨害した。

②最終的には、メシアを十字架に付ける。

③ルカ16:16

「律法と預言者は、ヨハネの時までである。それ以来、神の国の福音が告げ知らされ、だれもが力づくでそこに入ろうとしている」(ルカ16:16、新共同訳)

*信者の熱心さ、激しさが示されている。

- *当時、イエスを信じることはパリサイ主義を否定することであった。
- *共同体からの追放を覚悟することであった。
- *ユダヤ人社会では、今もそれは変わっていない。
- *日本での、似たような状況がある。

(3) 「あなたがたが進んで受け入れるなら、実はこの人こそ、きたるべきエリヤなのです」

①ヨハネは、自分はエリヤではないと明言していた(ヨハ1:21)。

②ルカ1:17の預言

「彼こそ、エリヤの霊と力で主の前ぶれをし、父たちの心を子どもたちに向けさせ、逆らう者を義人の心に立ち戻らせ、こうして、整えられた民を主のために用意するのです」(ルカ1:17)

③マラ4:5~6

「見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日が来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」(マラ4:5~6)

④民は、イエスをメシアとして受け入れるかどうかの決断を迫られていた。

⑤もし民がイエスを受け入れたなら、ヨハネは、すべてを回復するというエリヤの役割を成就したことになる。

⑥しかし、民はイエスを受け入れなかったため、その地は打ち滅ぼされた。

*紀元70年にそれが起こった。

⑦イスラエルの指導者たちは、イエスを拒否したため、ヨハネはエリヤの役割を果たせなかった。

⑧将来、エリヤ本人が到来する。

IV. イエスによる「今の時代」の評価(16~19節)

1. 16~17節

「この時代は何にたとえたらよいでしょう。市場にすわっている子どもたちのようです。彼らは、ほかの子どもたちに呼びかけて、こう言うのです。『笛を吹いてやっても、君たちは踊らなかつた。弔いの歌を歌ってやっても、悲しまなかつた。』」

(1) 子ども遊びのシーンを例話として用いている。

①笛を吹くとは、結婚式ごっこである。

②弔いの歌を歌うとは、お葬式ごっこである。

(2) ある子どもたちが呼びかけても、他の子どもたちは応じなかった。

①これらの子どもたちを喜ばせるのは、難しい。

(例話) 批判的な人を満足させるのは難しい

(集会の雰囲気、クリスチヤンの生活ぶり、化粧など)

2. 18～19節

「ヨハネが来て、**食べも飲みもしないと、人々は『あれは悪霊につかれているのだ』**と言
い、**人の子が来て食べたり飲んだりしていると、『あれ見よ。食いしんぼうの大酒飲み、
取税人や罪人の仲間だ』**と言います。でも、**知恵の正しいことは、その行いが証明します**」

(1) ヨハネの奉仕は、悔い改めと断食の勧めであった。

①預言者エリヤの生活がモデルである。

②しかし人々は、ヨハネは悪霊につかれていると言った。

*悪霊につかれた偽預言者という意味である。

③モーセの律法では、死罪に当たる(申13:1～11、18:9～20)。

④ヨハネは、パリサイ人たちが批判するような悪霊つきではない。

(2) イエスの奉仕は、喜びを与えるためのものであった。

①ダビデ王の生活がモデルである。

②しかし人々は、「**食いしんぼうの大酒飲み、取税人や罪人の仲間だ**」と言った。

③これもまた、モーセの律法では死罪に当たる(申21:20)。

④イエスは、パリサイ人たちが批判するような生活はされなかった。

⑤また、取税人や罪人に近づいたのは、彼らを救うためであった。

(3) いずれの場合でも、批判的なパリサイ人たちを満足させることはできなかった。

①ヨハネの奉仕が、お葬式ごっこに対応している。

②イエスの奉仕が、結婚式ごっこに対応している。

③いずれの場合も、パリサイ人たちは同意しなかった。

(4) 「**でも、知恵の正しいことは、その行いが証明します**」

①イエスは、「知恵」が受肉した方である。

*知恵を擬人法的に解釈すればよい。

②イエスの正しさは、結果が証明している。

*イエスが行っている奇跡

*イエスを信じて、その生き方が変えられた人々

結論：現代的適用

1. 教会時代の祝福について

(1) マタ 11 : 11

「まことに、あなたがたに告げます。女から生まれた者の中で、バプテスマのヨハネよりすぐれた人は出ませんでした。しかも、天の御国の一番小さい者でも、彼より偉大です」

- ①ヨハネは、旧約時代最後の預言者で、旧約時代の聖徒たちの中で最もすぐれた者である。
- ②ここでは、ヨハネは十字架と復活を目撃しないで死ぬことが暗示されている。
- ③ヨハネは、新約時代ではなく、旧約時代に属している聖徒である。

(2) ここには、新約時代の聖徒と、旧約時代の聖徒の比較がある。

- ①新約時代の聖徒の中で一番小さい者でも、ヨハネより偉大である。
- ②その偉大さの内容は何か。
 - *御国で与えられる地位と任務において
 - *メシアに関する知識において

(3) 神に従う生活は時には困難であるが、それはとてつもない特権である。

- ①天の御国に宝を積む生活とは何かを考える。

(例話) 小さなレストランに行くと、従業員かオーナーかすぐに分かる。
- ②クリスチャン生活の秘訣は、何事もキリストに仕えるようにすることである。

2. 終末への希望について

(1) マタ 17 : 10~13

「そこで、弟子たちは、イエスに尋ねて言った。『すると、律法学者たちが、まずエリヤが来るはずだと言っているのは、どうしてでしょうか。』イエスは答えて言われた。『エリヤが来て、すべてのことを立て直すのです。しかし、わたしは言います。エリヤはもうすでに来たのです。ところが彼らはエリヤを認めようとせず、彼に対して好き勝手なことをしたのです。人の子もまた、彼らから同じように苦しめられようとしています。』そのとき、弟子たちは、イエスがバプテスマのヨハネのことを言われたのだと気づいた」

- ①ヨハネはエリヤの働きをするために来た。
- ②しかし、指導者たちはヨハネを認めず、結果的にはヨハネを殺してしまった。
- ③ヨハネの奉仕が失敗したという意味ではない。

- ④ヨハネを信じた人は、イエスがメシアであることを信じた。
- ⑤先駆者に起こったことは、メシアにも起こる。死の預言。

(2) マラ4:5~6

「見よ。わたしは、【主】の大いなる恐ろしい日に来る前に、預言者エリヤをあなたがたに遣わす。彼は、父の心を子に向けさせ、子の心をその父に向けさせる。それは、わたしが来て、のろいでこの地を打ち滅ぼさないためだ」(マラ4:5~6)

- ①この預言は、まだ成就していない。
- ②エリヤは、やがて登場する。
 - *エリヤは死を経ないで天に上げられた預言者である。
- ③エリヤは、再臨の前、また、大患難時代の前に登場する。
- ④その働きは、ユダヤ人の回復である。
- ⑤これは、ユダヤ人の民族的救いへの準備となる。
 - (例話) 文脈を無視して、この聖句を自分の働きに利用してはならない。
- ⑥エリヤがいつ登場するかは、分からない。
 - (例話) 過越の祭りでは、エリヤの席が用意される。
 - 食事の後、エリヤの杯にぶどう酒を注ぎ、玄関の扉を開ける。

(3) 終末時代への見通し

- ①エリヤの到来
- ②大患難時代
- ③イスラエルの民族的救い
- ④メシアの地上再臨
 - *教会時代の聖徒たちは、大患難時代の前に携挙される。

「悔い改めない町々」

§ 058 マタ 11 : 20~30

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ヨハネの弟子たちが帰ると、イエスは群衆に向かって話し始めた。
- ②イエスはヨハネを非常に高く評価された。
- ③イエスは、不信仰な時代を責めた。

(2) 初臨においては、裁きはメシアの中心的な使命ではない。

- ①しかし、イエスは罪を糾弾された。
- ②きょうの箇所では、特に不信仰な3つの町が取り上げられている。

(3) 聖書が教える裁きの原則：祝福や特権を多く受けた者には、多くの責任が伴う。

①アモ 3 : 2

「わたしは地上のすべての部族の中から、あなたがただけを選び出した。それゆえ、わたしはあなたがたのすべての咎をあなたがたに報いる」

②ルカ 12 : 48

「しかし、知らずにいたために、むち打たれるようなことをしたしもべは、打たれても、少しく済みます。すべて、多く与えられた者は多く求められ、多く任された者は多く要求されます」

③ロマ 2 : 12

「律法なしに罪を犯した者はすべて、律法なしに滅び、律法の下にあって罪を犯した者はすべて、律法によってさばかれます」

(4) ガリラヤ湖畔の4つの町

- ①コラジン
- ②ベツサイダ
- ③カペナウム
- ④テベリヤ

*今日、テベリヤだけが町として栄えている。

(5) A. T. ロバートソンの調和表

機会を与えられた町々の上に呪いを宣告するイエス (§ 58)

2. アウトライン

- (1) 不信仰な町々の叱責 (20～24 節)
- (2) 不信仰の理由 (25～27 節)
- (3) 休息への招き (28～30 節)

3. 結論：現代的適用

- (1) 終末的裁きについて
- (2) 休息について

このメッセージは、イエスにある休息について学ぼうとするものである。

I. 不信仰な町々の叱責 (20～24 節)

1. 20 節

「それから、イエスは、数々の力あるわざの行われた町々が悔い改めなかったので、責め始められた」

- (1) 祝福を受けた者の責任は、大きい。
 - ①町々とは、その町の住民たちのことである。
 - ②イエスは、それらの町々で数々の奇跡を行われた。
 - ③それでも彼らは、悔い改めなかった。

2. 21～22 節

「ああコラジン。ああベツサイダ。おまえたちのうちで行われた力あるわざが、もしもツロとシドンで行われたのだったら、彼らはどうの昔に荒布をまとい、灰をかぶって悔い改めていたことだろう。しかし、そのツロとシドンのほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえたちよりは罰が軽いのだ」

- (1) この箇所から、情報不足を痛感させられる。
 - ①コラジンに関しては、福音書に情報が無い。
 - ②ベツサイダに関しては、若干の情報がある。
 - ③ヨハ 21 : 25
「イエスが行われたことは、ほかにもたくさんあるが、もしそれらをいちいち書きしるすなら、世界も、書かれた書物を入れることができまい、と私は思う」
- (2) イスラエルの2つの町と異邦人の2つの町が対比させられている。
 - ①コラジンとベツサイダ対ツロとシドン

- ②両者に共通するのは、ともに不信仰の町であるということ。
- ③異なるのは、前者がメシアに直接接触し、多くの奇跡を目撃したということ。
- ④もしツロとシドンが同じことを目撃していたなら、彼らはとうの昔に悔い改めていたことだろう。

(3) ツロとシドンへの裁きの預言は、エゼ 26～28 章にある。

- ①彼らは、偶像礼拝と罪のゆえに裁かれる。
- ②しかし、彼らの上を下る裁きよりも、イスラエルの2つの町に下る裁きの方がより厳しいものとなる。

3. 23～24 節

「カペナウム。どうしておまえが天に上げられることがありえよう。ハデスに落とされるのだ。おまえの中でなされた力あるわざが、もしもソドムでなされたのだったら、ソドムはきょうまで残っていたことだろう。しかし、そのソドムの地のほうが、おまえたちに言うが、さばきの日には、まだおまえよりは罰が軽いのだ」

(1) カペナウムとソドムとが対比させられている。

- ①カペナウムは、特に特権に与った町である。
- ②イエスはここを伝道の拠点とされた。
- ③ソドムは、淫乱の罪のゆえに裁かれた(創 19 章)。
- ④もしソドムが同じ特権に与っていたなら、ソドムは悔い改め、滅びることはなかったであろう。

(2) 裁きの日には、カペナウムはソドムに下ったもの以上の罰を受ける。

II. 不信仰の理由 (25～27 節)

1. 25～26 節

「そのとき、イエスはこう言われた。『天地の主であられる父よ。あなたをほめたたえま
す。これらのことを、賢い者や知恵のある者には隠して、幼子たちに現してくださいまし
た。そうです、父よ。これがみこころにかなったことでした』」

(1) この箇所は、ヨハ 14～17 章のイエスの祈りを思わせる。

- ①イエスは、父に呼びかけておられる。
- ②イエスは、ガリラヤの町々の不信仰のゆえに、絶望しているわけではない。
- ③この状況が父の御心に叶っていることを認め、御名を賛美している。

(2) 御名を賛美する理由

① 「賢い者や知恵のある者には隠して、」

*当時のユダヤ教のリーダーたちのことである。

② 「幼子たちに現してくださいました」

*幼子のような信頼をもって近づく人のことである。

(3) 1コリ1:26~27

「兄弟たち、あなたがたの召しのことを考えてごらんください。この世の知者は多くはなく、権力者も多くはなく、身分の高い者も多くはありません。しかし神は、知恵ある者はずかしめるために、この世の愚かな者を選び、強い者はずかしめるために、この世の弱い者を選ばれたのです」

(4) イエスの真意

①イエスは、裁きを喜んでいるわけではない。

②知者たちに対して光を遮断しているわけでもない。

*彼らがイエスを拒否することを選べば、イエスの光を遮断する。

③信じない人がいれば、信じる人もいるという事実には、慰めを見い出している。

2. 27節

「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています。それで、父のほかには、子を知る者がなく、子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません」

(1) 父と子の深遠な関係が表現されている。

(2) 「すべてのものが、わたしの父から、わたしに渡されています」

①永久のアオリスト (timeless aorist) である。

②マタ 28:18 も同じである。

「わたしには天においても、地においても、いっさいの権威が与えられています」

③これは、イエスの神性宣言である。

(3) 「父のほかには、子を知る者がなく、」

①イエスの本質は、人であり神である。

②このことを真の意味で理解できるのは、父しかいない。

(4) 「子と、子が父を知らせようと心に定めた人のほかは、だれも父を知る者がありません」

「悔い改めない町々」

- ①人は自力で父を知ることはできない。
- ②イエスは私たちに父を示すことができる。
- ③御子を知った者は、父を知ったのである。
- ④ヨハ14:7

「あなたがたは、もしわたしを知っていたなら、父をも知っていたはずですが。しかし、今や、あなたがたは父を知っており、また、すでに父を見たのです」

Ⅲ. 休息への招き (28～30節)

1. 28節

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」

(1) 不信仰な町々を叱責しながらも、真理を求める人たちを招いておられる。

① 「すべて、疲れた人、重荷を負っている人」

*罪の重荷

*あるいは、口伝律法の重荷

(2) 信仰の対象は、イエスである。

2. 29～30節

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます。わたしのくびきは負いやすく、わたしの荷は軽いからです」

(1) 「わたしのくびきを負って、わたしから学びなさい」

- ①これはラビ用語で、イエスの学校に入学することを意味する。
- ②これは、ラビ的ユダヤ教を出て、イエスの学校に来なさいという招きである。
- ③今みなさんは、「わたしから学びなさい」という命令を実行している。

(2) 魂に安らぎが与えられるという約束がある。

- ①イエスは、「わたしは柔和で謙遜な者だから、」(新共同訳)と言われた。
- ②口伝律法や罪の重荷と比較して、イエスのくびきは負いやすい。

結論：現代的適用

1. 終末的裁きについて

(1) マタ 11 : 20~23 は、ハデスでの裁きが均一ではないことを教えている。

①多くの光が与えられた者は、より厳しい裁きを受ける。

②不信者は最後に「火の池」に行くが、苦しみの度合いは異なる。

(2) 信者が受ける報酬にも軽重がある。

「イエス・キリストという既に据えられている土台を無視して、だれもほかの土台を据えることはできません。この土台の上に、だれかが金、銀、宝石、木、草、わらで家を建てる場合、おのおのの仕事は明るみに出されます。かの日にそれは明らかにされるのです。なぜなら、かの日が火と共に現れ、その火はおのおのの仕事がどんなものであるかを吟味するからです。だれかがその土台の上に建てた仕事が残れば、その人は報いを受けますが、燃え尽きてしまえば、損害を受けます。ただ、その人は、火の中をくぐり抜けて来た者のように、救われます」(1 コリ 3 : 11~15) (新共同訳)

2. 休息について

マタ 11 : 28

「すべて、疲れた人、重荷を負っている人は、わたしのところに来なさい。わたしがあなたがたを休ませてあげます」

(1) イザ 45 : 22

「地の果てのすべての者よ。わたしを仰ぎ見て救われよ。わたしが神である。ほかにはいない」

(2) ヨハ 1 : 12

「しかし、この方を受け入れた人々、すなわち、その名を信じた人々には、神の子どもとされる特権をお与えになった」

(3) ヨハ 6 : 35

「イエスは言われた。『わたしがいのちのパンです。わたしに来る者は決して飢えることがなく、わたしを信じる者はどんなときにも、決して渇くことはありません』」

(4) ヨハ 7 : 37~38

「さて、祭りの終わりの大いなる日に、イエスは立って、大声で言われた。『だれでも渇いているなら、わたしのもとに来て飲みなさい。わたしを信じる者は、聖書が言っているとおり、その人の心の奥底から、生ける水の川が流れ出るようになる』」

(5) マタ9:20~21

「すると、見よ。十二年の間長血をわずらっている女が、イエスのうしろに来て、その着物のふさにさわった。『お着物にさわることでもできれば、きっと直る』と心のうちで考えていたからである」

(6) 1ヨハ4:2

「人となって来たイエス・キリストを告白する霊はみな、神からのものです。それによって神からの霊を知りなさい」

(7) ロマ6:23

「罪から来る報酬は死です。しかし、神の下さる賜物は、私たちの主キリスト・イエスにある永遠のいのちです」

「パリサイ人シモンと罪深い女」

§ 059 ルカ 7 : 36～50

1. はじめに

(1) 文脈の確認

①ルカ 7 : 35 の例証

「だが、知恵の正しいことは、そのすべての子どもたちが証明します」

②この出来事を記録しているのは、ルカだけである。

③ルカは、女性の役割を重視して福音書を書いている。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

罪深い女によるイエスの油注ぎ (§ 59)

2. アウトライン

(1) 舞台設定 (36 節)

(2) 招かれざる客の登場 (37～39 節)

(3) ラビの講話 (40～47 節)

(4) 講和の結論 (48～50 節)

3. 結論 :

(1) この女の名前について

(2) 救いの構造について

(3) 救いの確信について

このメッセージは、聖書が教える救いについて学ぼうとするものである。

I. 舞台設定 (36 節)

1. 36 節

「さて、あるパリサイ人が、いっしょに食事をしたい、とイエスを招いたので、そのパリサイ人の家に入って食卓に着かれた」

(1) この宴会の意味

①宴会は、宗教的、道徳的講話を聞く場となっていた。

②ラビを招いてこのような宴会を開くことは、高潔なことだと考えられていた。

③これは、他の町からやって来た巡回ラビに敬意を表するための宴会である。

- ④一般の人たちにも扉が開かれており、傍聴が許された。
- ⑤今私たちも、傍聴者の立場でラビの講和に耳を傾けようとしている。

(2) 主人は、パリサイ人のシモンである。

- ①彼は、イエスに敬意を示すためではなく、別の目的のために宴会を開いた。
- ②彼の動機は、隠されていた。
 - *イエスがメシアであるかどうか、疑っている。
 - *イエスを試そうとしている。

II. 招かれざる客の登場 (37～39 節)

1. 37～38 節

「すると、その町にひとりの罪深い女がいて、イエスがパリサイ人の家で食卓に着いておられることを知り、香油の入った石膏のつぼを持って来て、泣きながら、イエスのうしろで御足のそばに立ち、涙で御足をぬらし始め、髪の毛でぬぐい、御足に口づけして、香油を塗った」

(1) ひとりの罪深い女の登場

- ①「罪深い女」(罪の女)とは、娼婦の婉曲語である。
 - *当時は、異邦人の娼婦もたくさんいたが、彼女はユダヤ人である。
- ②彼女がこのような場にいるのは、異常なことである。
- ③通常は、戸口に召使が立っていて、入室を制限していた。
- ④宗教的なユダヤ人の場合は、貧しい人たちも中に入って話を聞けるように、扉を開いていた。それで、彼女も中に入れたのであろう。
- ⑤傍聴者は食卓から離れて立ち、黙ってラビと主人の話に耳を傾ける。

(2) 彼女の行動

- ①香油の入った石膏のつぼを持って来た。
 - *石膏とは、アラバスターのこと。
 - *エジプトのテーベ、シリアのダマスコ、イタリアなどで採れる。
 - *香油を入れるのに、最適な器とされていた。
- ②泣いていた。
 - *ギリシア語の「クライオウ (klaiou)」(声を上げて泣いている状態)
- ③イエスのうしろで御足のそばに立った。
 - *左ひじをついて、横になった姿勢で食事をしていたので、足は外にあった。
- ④涙で御足をぬらし

*ギリシア語の「ブレコウ」(雨で水に濡れる)

⑤髪のもでぬぐい

*宗教的な婦人は、頭にかぶり物をしていた。

*公の場で髪のもを見せることは、不道德なことであった。

*彼女は、宗教的には主流から離れていた。

⑥御足に口づけして

*継続した動作(未完了形)

⑦香油を塗った。

*頭ではなく足に油を塗ったのは、彼女の謙遜の表れである。

*香油は、彼女が商売で使用する物で、パリサイ人には忌むべきものである。

2. 39節

「イエスを招いたパリサイ人は、これを見て、『この方がもし預言者なら、自分にさわっている女がだれで、どんな女であるか知っておられるはずだ。この女は罪深い者なのだから』と心ひそかに思っていた」

(1) パリサイ人シモンの落胆

①イエスは預言者ではない。

②なぜなら、自分にさわっている女が悪名高い女であることを知らないから。

③彼は、心ひそかにイエスについての結論を出した。

(2) 次の講和で、イエスはシモンの心の中を見抜いていることを証明される。

Ⅲ. ラビの講話(40～47節)

1. 40～42節

「するとイエスは、彼に向かって、『シモン。あなたに言いたいことがあります』と言われた。シモンは、『先生。お話してください』と言った。『ある金貸しから、ふたりの者が金を借りていた。ひとは五百デナリ、ほかのひとは五十デナリ借りていた。彼らは返すことができなかったので、金貸しはふたりとも赦してやった。では、ふたりのうちどちらがよけいに金貸しを愛するようになるでしょうか』

(1) 家の主人、招かれた客、傍聴人がいる中で、いよいよラビの講話が始まる。

①講話は、たとえ話と質疑応答の形で、展開される。

(2) 500デナリの借金を赦された人と、50デナリの借金を赦された人の対比

①借金は7年目に赦されるというのが律法の教えである。

②しかし、律法学者たちは「抜け道」を作っていた。

*投獄、奴隷、質物を取ることなど

③このたとえ話では、金貸しは恵みを与えた。

④たとえ話のポイントは、どちらがより多くその金貸しを愛するかという質問。

2. 43 節

「シモンが、『よけいに赦してもらったほうだと思います』と答えると、イエスは、『あなたの判断は当たっています』と言われた」

(1) シモンは、正しい判断をした。

①この判断によって、彼は自分自身を裁くことになる。

3. 44～47 節

「そしてその女のほうを向いて、シモンに言われた。『この女を見ましたか。わたしがこの家に入って来たとき、あなたは足を洗う水をくれなかったが、この女は、涙でわたしの足をぬらし、髪の毛でぬぐってくれました。あなたは、口づけしてくれなかったが、この女は、わたしが入って来たときから足に口づけしてやめませんでした。あなたは、わたしの頭に油を塗ってくれなかったが、この女は、わたしの足に香油を塗ってくれました。だから、わたしは「この女の多くの罪は赦されている」と言います。それは彼女がよけい愛したからです。しかし少ししか赦されない者は、少ししか愛しません』

(1) ここから、たとえ話の適用が始まる。

①イエスは、このたとえ話を罪の女とシモンに適用する。

(2) 主人が客を歓迎するために行うことがいくつかあった。

①足を洗う(通常は、その家の僕がそれを行った)。

②男性同士は、頬に口づけをする。

③頭に油を塗る。

(3) しかし、シモンはそれをしなかった。

①イエスに対する疑いがあった。

②敬意を表しているかのように振る舞いながら、実はイエスを見下していた。

(4) 罪の女は、そのすべてを行った。しかも、謙遜に行った。

①涙で足をぬらし、髪の毛でぬぐった。

②足に口づけしてやめなかった。

③足に香油を塗った。

④多く赦されたことへの感謝が、これらの行動につながった。

(5) シモンには、赦されたという思いがない。

①それどころか、赦される必要があるとも感じていない。

IV. 講話の結論 (48～50 節)

1. 48～49 節

「そして女に、『あなたの罪は赦されています』と言われた。すると、いっしょに食卓にいた人たちは、心の中でこう言い始めた。『罪を赦したりするこの人は、いったいだれだろう』」

(1) ここでイエスは、公に彼女の罪の赦しを宣言された。

①これは、彼女が共同体の中で新しい人生を歩むために必要なものである。

②イエスは、メシア宣言はしていないが、メシアとして語っている。

(2) 食卓にいた人たちは、驚いた。

①神だけが罪を赦す権威を持っておられる。

②神殿で、罪過のささげ物が捧げられた後、祭司は罪の赦しを宣言することができた。

③イエスは、罪過のささげ物なしに、罪の赦しを宣言しておられる。

*十字架の死が罪過のささげ物となる。

④彼らは、イエスを信じるか、拒否するか判断を迫られた。

2. 50 節

「しかし、イエスは女に言われた。『あなたの信仰が、あなたを救ったのです。安心して行きなさい』」

(1) イエスは、信仰による救いを保証された。

①彼女は、安心して帰ることができた。

(2) いかなる精神科医も、この治療はできない。

結論：

1. この女の名前について

(1) ベタニヤのマリアではない。

- ①ヨハ12:1~3で、マリアはイエスに油を注いでいる。
- ②この2つの油注ぎは、全く別の出来事である。

(2) マグダラのマリアではない。

- ①この罪の女をマグダラのマリアと見るのは、後代の伝承である。
- ②そこから、マグダラのマリアに関する様々な憶測が生まれてくる。
- ③ルカ8:1~3で、イエスに仕える女たちの中にマグダラのマリアが登場する。
*これは、マグダラのマリアの初登場である。

(3) この罪の女、マグダラのマリア、ベタニヤのマリアを同一視する人もいる。

- ①これは、中世に生まれた伝承である。

2. 救いの構造について

(1) 彼女は、多く愛したから多く赦されたのではない。

- ①業による救いではない。

(2) 彼女は、多く赦されたから多く愛したのである。

- ①では、彼女はいつ多く赦されたのか。
- ②この場面に登場する前の彼女の情報が不足している。
- ③彼女がこれ以前に、イエスの話を聞いていたことは間違いない。
- ④その結果、彼女は罪の赦しを受け取っていたのである。

(3) 救いの構造

- ①信仰により、恵みによる。
- ②この段階では、イエスをメシアとして信じる信仰が彼女を救った。
- ③イエスはまだ十字架についていないが、それを前提に彼女に赦しを宣言した。

3. 救いの確信について

(1) ヤコ2:20~24

「ああ愚かな人よ。あなたは行いのない信仰がむなしいことを知りたいと思いませんか。私たちの父アブラハムは、その子イサクを祭壇にささげたとき、行いによって義と認められたではありませんか。あなたの見ているとおり、彼の信仰は彼の行いとともに関与したのであり、信仰は行いによって全うされ、そして、『アブラハムは神を信じ、その信仰が彼の義とみなされた』という聖書のことばが実現し、彼は神の友と呼ばれたのです。人は行いによって義と認められるのであって、信仰だけによるのではない

ことがわかるでしょう」

- ①ロマ書は、信仰とはなんであるかを教えている。
 - ②ヤコブ書は、信仰とはなんでないかを教えている。
 - ③その信仰が本物であれば、行動となって出て来る。
 - ④アブラハムの場合が、そうであった。
- (2) 罪の女が示した感謝は、救われた結果である。
- ①彼女はイエスから、確証の言葉を受けた。
 - ②信仰が行動に結びつく時、救いの確信が得られる。

「ベルゼブル論争」

§ 060 ルカ 8 : 1～3

§ 061 マタ 12 : 22～37

1. はじめに

(1) 文脈の確認

① § 060 ルカ 8 : 1～3 ガリラヤを巡る伝道旅行

* 12 弟子

* 女たち

* 「七つの悪霊を追い出していただいたマグダラの女と呼ばれるマリヤ」

② § 061 マタ 12 : 22～37 ベルゼブル論争

* 並行記事 マコ 3 : 19～30

「イエスの身内の者たちが聞いて、イエスを連れ戻しに出て来た。『気が狂ったのだ』と言う人たちがいたからである」(21 節)

* 宗教的に熱狂過ぎて、精神的なバランスを欠いていると誤解された。

* イエスの公生涯が、緊張した状態になっている。

* この箇所を正しく理解すると、それ以降のイエスの教えや行動が、容易に理解できるようになる。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「2 回目のガリラヤ伝道」 (§ 60)

「ベルゼブルと共謀しているという冒瀆的な批判」 (§ 61)

2. アウトライン

(1) メシア的奇跡 (22 節)

(2) パリサイ人の評価 (23～24 節)

(3) イエスの反論 (25～29 節)

(4) 裁きの宣言 (30～37 節)

3. 結論 :

(1) イエスの歴史性について

(2) 「赦されない罪」について

このメッセージは、イエスをメシアとして信じることの重要性について学ぼうとするものである。

I. メシア的奇跡 (22 節)

1. マコ 3 : 22 の情報

「エルサレムから下って来た律法学者たち」

(1) メシア運動を評価する 3 つの段階

- ① 観察段階 (沈黙の段階)
- ② 審問の段階 (質問、論争の段階)
- ③ 決定の段階 (その人物をメシアとして受け入れるか、拒否するか)

(2) この箇所は、決定の段階に入っている。

- ① エルサレムから下って来た律法学者たちは、代表団である。
- ② 彼らは、パリサイ人 (マタイの記述) と呼ばれている。
- ③ 批判する機会を捉えて、イエスのメシア性を公に拒否しようとしている。

2. メシア的奇跡

(1) メシアだけが行える奇跡

① ユダヤ人のツァラアト患者の癒し

* 前例がない。

② 口のきけない人からの悪霊の追い出し

* パリサイ人 (の仲間) たちの方法

- ・ 悪霊との交信を確立する。
- ・ 悪霊の名前を聞き出す。
- ・ その名前を呼んで追い出す。

* 口のきけない人の場合は、この方法が役に立たない。

③ 生まれつきの盲人の癒し

3. 22 節

「そのとき、悪霊につかれて、目も見えず、口もきけない人が連れて来られた。イエスが彼をいやされたので、その人はものを言い、目も見えるようになった」

(1) イエスの前に、ある人が置かれた。

- ① 悪霊につかれている。
- ② 盲目である。
- ③ 口もきけない。

- (2) 誰がその人を連れて来たかは、書かれていない。
 - ①恐らく、パリサイ人が連れて来たのであろう。
 - ②この人は、コミュニケーションが不可能な人物である。
 - ③通常の悪霊追い出し法は役に立たないので、イエスを試すチャンスである。

- (3) イエスは、その人から悪霊を追い出した。
 - ①その人は、ものが言えるようになった。
 - ②目も見えるようになった。

II. パリサイ人の評価 (23～24 節)

1. 群衆の応答 (23 節)

「群衆はみな驚いて言った。『この人は、ダビデの子なのだろうか』」

- (1) 「ダビデの子」とは、メシア的称号である。
 - ①旧約聖書で悪霊を追い出した人は、ダビデだけである。
「神の霊がサウルに臨むたびに、ダビデは立琴を手にとって、ひき、サウルは元気を回復して、良くなり、わざわいの霊は彼から離れた」(1サム16:23)

- (2) ものを言えない人からの悪霊の追い出しは、メシア的奇跡だと教えられてきた。
 - ①彼らは、自分で判断しないで、パリサイ人の顔色をうかがった。
 - ②旧約時代、王が善王か悪王かで、群衆の進む道は違った。
 - ③イエス時代、群衆はミシュナ法(口伝律法)によって支配されていた。
 - ④今でもユダヤ人は、「ではなぜ、ラビたちはイエスを信じないのか」と質問する。

- (3) 「この人は、ダビデの子なのだろうか」
 - ①「Can this be the son of David?」(ASV)
 - ②この質問は、「NO」という答えを予想する形になっている。
 - ③群衆は、パリサイ人がイエスに敵対していることを知っていた。

2. パリサイ人の説明 (24 節)

「これを聞いたパリサイ人は言った。『この人は、ただ悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ』」

- (1) ベルゼブルは、ペリシテ人(エクロンの町)の偶像神のひとつである。
 - ①その意味は、「王宮の主」である。

- ②ユダヤ人たちは、Beelzebul の最後の文字をbに変え、Beelzebub とした。
 - ③ヘブル語の「ベルゼバブ」の意味は、「蠅の主」である。
 - ④イエス時代、ユダヤ人たちは「ベルゼバブ」をサタンの名称としていた。
- (2) イエスが悪霊を追い出したことは否定していない。
- ①群衆がすでに目撃している事実である。
- (2) 悪霊を押し出した力について、説明をしている。
- 「ただ悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ」
- ①パリサイ人の仲間が行う悪霊の追い出しは、神の力による。
 - ②イエスの場合は、ベルゼブルの力による。
 - ③これは、言い逃れである。
 - ④これは、イエスのメシア性を公に拒否した宣言である。
 - ⑤彼らがイエスを拒否した理由は、イエスがパリサイ主義を否定したからである。

Ⅲ. イエスの反論 (25～29 節)

1. 25～26 節

「イエスは彼らの思いを知ってこう言われた。『どんな国でも、内輪もめして争えば荒れすたれ、どんな町でも家でも、内輪もめして争えば立ち行きません。もし、サタンがサタンを追い出していて仲間割れしたのだったら、どうしてその国は立ち行くでしょう』」

- (1) サタンが戦略的意図で、一時的に悪霊を退却させることはあり得る。
 - ①その目的は、束縛をより強めるためである。
- (2) しかし、イエスが行っておられるのは、完全な悪霊の追い出しである。
 - ①もしサタンの力でそれを行っているなら、サタンの国は崩壊するしかない。

2. 27 節

「また、もしわたしがベルゼブルによって悪霊どもを追い出しているのなら、あなたがたの子らはだれによって追い出すのですか。だから、あなたがたの子らが、あなたがたをさばく人となるのです」

- (1) 「あなたがたの子ら」とは、パリサイ人の仲間のことである。
 - ①旧約聖書には、「預言者のともがら (仲間)」という言葉がある。
- (2) パリサイ人の中には、悪霊の追い出しを行う者たちがいた。

- ①12使徒にも、悪霊を追い出す権威が与えられた(マタ10:1)。
- ②パリサイ人は、悪霊を追い出す権威は神からの賜物だと教えていた。

(3) イエスは、彼らの矛盾(二重基準)をついた。

3. 28節

「しかし、わたしが神の御霊によって悪霊どもを追い出しているのなら、もう神の国はあなたがたのところに来ているのです」

- (1) イエスの奇跡は、イエスがメシアであることの証明となっている。
 - ①メシアが今ともおられるなら、すでに神の国は来ているのである。
- (2) この宣言は、パリサイ人には大打撃となった。
 - ①彼らは自らの神学的知識を誇っていた。
 - ②しかし、イエスがメシアとしてそこに立っておられることに気づけなかった。

4. 29節

「強い人の家に入って家財を奪い取ろうとするなら、まずその人を縛ってしまわないで、どうしてそのようなことができましょうか。そのようにして初めて、その家を略奪することもできるのです」

- (1) イエスは、自分がサタンよりも強いことを証明された。
 - ①「強い人の家」とは、サタンが支配するこの世のことである。
 - ②「家財を奪い取る」とは、サタンの支配下にいる人を解放することである。
 - ③「その人を縛る」とは、サタンに対する勝利を示す比喩的言葉である。
- (2) 従って、イエスがサタンに仕えているわけではない。

IV. 裁きの宣言(30~37節)

- 1. イエスは、警告と裁きのことばを語る。
 - (1) 群衆に、正しい決断をするようにと促す。
 - (2) この判断が、将来の運命を決するものとなる。

2. 31節

「だから、わたしはあなたがたに言います。人はどんな罪も冒瀆も赦していただけます。しかし、御霊に逆らう冒瀆は赦されません。また、人の子に逆らうことばを口にする者で

も、赦されます。しかし、聖霊に逆らうことを言う者は、だれであっても、この世であろうと次に来る世であろうと、赦されません」

- (1) イエスを拒否することは、聖霊に逆らうことである。
 - ①聖霊に逆らう冒瀆は、赦されない。
 - ②どんな罪でも赦されるが、この罪だけは赦されない。
 - ③個人であっても、国家であっても、赦されない。
 - ④この世であろうと次に来る世であろうと、赦されない。
 - * 「次に来る世」とはメシア的王国である。

(2) 33～37 節

- ①イエスは群衆に指導者たちが本物かどうか見分けよと迫る。
- ②判断基準は、よい実をつけているか、悪い実をつけているか。

結論：

1. イエスの歴史性について

(1) マタ 12 : 24

「これを聞いたパリサイ人は言った。『この人は、ただ悪霊どものかしらベルゼブルの力で、悪霊どもを追い出しているだけだ』」

(2) この見解が、タルムードに反映されている。

- ①「イエスは過越の祭りで殺されねばならなかった。なぜなら、魔術を使ってイスラエルを誘惑したからである」
- ②「イエスは特別な力を持っていた。その理由は、神の御名（ヤハウエという4文字）を自分の腕に刻んでいたからである」

(3) タルムードでは、イエスが奇跡を行ったことは否定されていない。

- ①イエスが行ったしるしは悪魔の力によるものだという理由で、イエスのメシア性が拒否された。

2. 「赦されない罪」について

(1) この罪は、今の私たちが犯せる罪ではない。

- ①この言葉によって、信者を束縛してはならない。

(2) 「赦されない罪」の条件と内容

- ①イエスがメシアとして地上におられること
- ②イエスのしるしを悪魔的なものと判断し、そのメシア性を拒否すること
- ③イエスのメシア性を国家的に拒否すること
 - *当時、イエスをメシアとして受け入れる個人は多くいた。
- ④この罪は、イエスと同時代のユダヤ人だけが犯せる罪である。

(3) この罪の結果

- ①メシア的王国の成就是、将来の世代まで延期された。
- ②大患難時代の終わりに再度提示され、その世代のユダヤ人たちは受け取る。
「わたしは、ダビデの家とエルサレムの住民の上に、恵みと哀願の霊を注ぐ。彼らは、自分たちが突き刺した者、わたしを仰ぎ見、ひとり子を失って嘆くように、その者のために嘆き、初子を失って激しく泣くように、その者のために激しく泣く」(ゼカ12:10)
- ③紀元70年にエルサレムが滅び、ユダヤ人たちは離散の民となる。
- ④それまでの40年間は、恵みの期間である。

「しるしを求める律法学者とパリサイ人たち」

§ 062 マタ 12 : 38~45

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベルゼブル論争が行われた。
- ②ユダヤ人たちは公にイエスのメシア性を拒否した。
- ③この出来事は、イエスの公生涯の分岐点となった。
- ④さらに、この出来事は、ユダヤ人の歴史の分岐点ともなった。

(2) きょうの箇所では、宗教的指導者たちがさらに「しるし」を求めている。

- ①イエスの回答によって、ユダヤ民族が危機に瀕していることが分かる。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「律法学者とパリサイ人たちはしるしを求める」 (§ 62)

2. アウトライン

- (1) 質問 (38 節)
- (2) 預言による回答 (39~40 節)
- (3) 対比による回答 (41~42 節)
- (4) たとえ話による回答 (43~45 節)

3. 結論 :

- (1) 神に聞かれない祈り
- (2) ヨナのしるし
- (3) 回帰不能点

このメッセージは、人生の分岐点について学ぼうとするものである。

I. 質問 (38 節)

1. 38 節

「そのとき、律法学者、パリサイ人たちのうちのある者がイエスに答えて言った。『先生。私たちは、あなたからしるしを見せていただきたいのです』」

- (1) 宗教的指導者たちが、民衆の考え方を束縛していた。

- ①民衆は、羊のように彼らに従っていた。
- (2) 「先生。私たちは、あなたからしるしを見せていただきたいのです」
 - ①イエスはこれまでに、メシア的奇跡も含めて数々のしるしを行ってきた。
 - ②宗教的指導者たちは、それらのしるしをすべて拒否した。
 - ③彼らは、もうひとつ、新しいしるしを求めた。
 - ④癒しや悪霊の追い出し以上の、天からのしるしを求めた。
- (3) イエスの3つの回答
 - ①ユダヤ的説明法(2人、ないし3人の証言)

II. 預言による回答(39~40節)

1. 39a節

「しかし、イエスは答えて言われた。『悪い、姦淫の時代はしるしを求めています』」

- (1) ユダヤ人は「しるし」を求める民である。
 - ①彼らの場合は、見る→信じる、となる。
- (2) しかし、「しるし」は信仰の必要条件ではない。
 - ①イエスの教えを聞いただけで、イエスをメシアと信じることができる。
 - ②「しるし」を求める時代は、そもそも異常なのである。
 - ③イエスの教えは、信じる→見る、である。
 - ④ヨハ20:29
「イエスは彼に言われた。『あなたはわたしを見たから信じたのですか。見ずに信じる者は幸いです』」
- (3) 「悪い、姦淫の時代」とは何か。
 - ①「悪い時代」
 - *彼らは、イエスがメシアであるという事実に意識的に目をつむっている。
 - ②「姦淫の時代」
 - *彼らは、靈的に神に対して不真実である。
 - *形式的信仰生活(口伝律法に基づく)を送っている。
 - *イエスのメシア性を拒否している。

2. 39b~40節

「だが預言者ヨナのしるしのほかには、しるしは与えられません。ヨナは三日三晩大魚の腹の中にいましたが、同様に、人の子も三日三晩、地の中にいるからです」

(1) 彼らには、もうひとつのしるしが与えられるが、その時は手遅れになっている。

①「ヨナのしるし」は、彼らがイエスを拒否した結果与えられるものである。

(2) ヨナは、当時のユダヤ人たちには人気のない預言者であった。

①ヨナは最初、主の命令に反抗した。

②ユダヤ人たちの解釈

*ヨナが主の命令に反抗した理由は、恐れであった。

*ニネベの人たちが悔い改めたなら、ユダヤ人の不信仰が際立つ。

(3) ヨナは、三日三晩大魚の腹の中にいた。

①彼は死んでいたが、やがて甦った。

②ヨナの経験は、イエスの死と復活の予表となっている。

③イエスは、自らの死と復活を予知しておられた。

④ユダヤ的には、24時間でなくても、1日と数える。

(4) これ以降、「しるし」としての奇跡はなくなる。

①イエスは、弟子訓練のためにだけ奇跡を行うようになる。

②弟子たちは、使徒行伝の時代のために訓練を受ける。

Ⅲ. 対比による回答 (41～42 節)

1. 41 節

「ニネベの人々が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めます。なぜなら、ニネベの人々はヨナの説教で悔い改めたからです。しかし、見なさい。ここにヨナよりもまさった者がいるのです」

(1) ニネベの人々

①彼らは「しるし」を求めたわけではない。

②しかし、預言者ヨナが遣わされ、ヨナが彼らにとっての「しるし」となった。

③それだけで彼らは神を信じ、悔い改めた。

(2) 「今の時代の人々」

①ヨナよりもまさった者が、彼らの間を歩まれた。

*「ここに、ヨナにまさるものがある」(新共同訳)

*「プレイオン」という言葉は、中性形である。

*メシアが提供しておられる神の国のことである。

②それでも彼らは、「しるし」を求め続けた。

③彼らは、それ以前のどの世代の者たちよりも特権に与った。

(3) 異邦人たちは、より少ない「光」によって信じた。

①彼らは、「今の時代の人々」よりもはるかに信仰的であった。

②終わりの日(裁きの日)に「今の時代の人々」が裁かれるのは、確実である。

2. 42節

「南の女王が、さばきのときに、今の時代の人々とともに立って、この人々を罪に定めま
す。なぜなら、彼女はソロモンの知恵を聞くために地の果てから来たからです。しかし、
見なさい。ここにソロモンよりもまさった者がいるのです」

(1) 南の女王

①1列10:1~10

「ときに、シェバの女王が、【主】の名に関連してソロモンの名声を伝え聞き、難
問をもって彼をためそうとして、やって来た」(1列10:1)

②シェバは、現在のイエメンである。

③しかし、伝承では彼女はエチオピアの女王とされている。

④彼女は、ソロモンの知恵と富を試すために、やって来た。

⑤古代世界では、このような行為は、気晴らしのための遊びであった。

⑥彼女は、単なる噂だけで、長旅をしてソロモンに会いに来た。

(2) 「今の時代の人々」

①イエスほど長旅をされた方はいない。

*天から下り、人となられた。

②ソロモンよりもまさった者が彼らの間を歩まれた。

③しかし彼らは、そのお方に会うために、短い旅さえしようとはしなかった。

(3) 異邦人の女王は、より少ない「光」によって信じた。

①彼女は、「今の時代の人々」よりもはるかに信仰的であった。

②終わりの日(裁きの日)に「今の時代の人々」が裁かれるのは、確実である。

IV. たとえ話による回答(43~45節)

1. 43～44節

「汚れた霊が人から出て行って、水のない地をさまよいながら休み場を捜しますが、見つかりません。そこで、『出て来た自分の家に帰ろう』と言って、帰って見ると、家はあい
ていて、掃除してきちんとかたづいていました」

(1) ある人が悪霊を追い出してもらった。

①その人の心は、掃除してきちんと片づいた状態にある。

②しかしその人は、心に聖霊を迎えていない。

(2) 出て行った悪霊が再びその人の心に戻って来た。

①悪霊は、その人の内側がきれいになっているので、驚いた。

2. 45節 a

「そこで、出かけて行って、自分よりも悪いほかの霊を七つ連れて来て、みな入り込んで
そこに住みつくのです。そうすると、その人の後の状態は、初めよりもさらに悪くなりま
す」

(1) 悪霊は、自分よりも悪いほかの7つの悪霊を連れて来る。

①「7」という数字は、聖書では、非常に厳しい裁きを指す言葉である。

②つまり、この人の状態は初めとは比較にならないくらい悪くなるということ。

3. 45節 b

「邪悪なこの時代もまた、そういうことになるのです」

(1) たとえ話の結論の部分

①このたとえ話は、「今の時代の人々」の状態を説明したものである。

(2) 内側が掃除された。

①バプテスマのヨハネは、メシアを迎える準備をした。

(3) 内側は空になっている。

①しかし彼らは、イエスを信じていない。

*彼らの信仰は、形式的なものであった。

*彼らは、口伝律法を実行しようとしていた。

②超自然的な回心体験がないことが、致命的な欠陥であった。

(4) 初めの状態よりもはるかに悪い状態がやって来る。

①イエスが登場した時代、イスラエルは多少の自治権を持っていた。

*ローマ帝国に対する税の支払いはあった。

②この時から40年後、エルサレムは滅ぼされた。

*神殿の崩壊

*ユダヤ人の世界離散

*系図や歴史的記録の破壊

③今でも、多くのユダヤ人が世界に離散したままである。

結論：

1. 神に聞かれない祈り

(1) 律法学者とパリサイ人たちは、イエスに「もうひとつのしるし」を求めた。

(2) しかしイエスは、それには答えなかった。

(3) その理由

①彼らはすでに、十分すぎるほどの「しるし」を受けていた。

②与えられているものを用いないなら、次に必要なものは与えられない。

2. ヨナのしるし

(1) ラザロの蘇生(ヨハ11:1~45)

①この「しるし」によって、多くのユダヤ人たちが信じた。

(2) イエスの復活

(3) 2人の証人の復活(黙11章)

(4) 以上のことは、すべて3日が経ってから起こったことである。

①マタ27:52~53は、ヨナのしるしとなる条件を満たしていない。

「墓が開いて、眠りについていた多くの聖なる者たちの体が生き返った。そして、イエスの復活の後、墓から出て来て、聖なる都に入り、多くの人々に現れた」

3. 回帰不能点

(1) 民13~14章

①カデシュ・バルネアでの出来事

②モーセは12人のスパイを送り、40日間、約束の地の偵察を行わせた。

③10人は否定的な報告をもたらした。

④民14:22~23

「エジプトとこの荒野で、わたしの栄光とわたしの行ったしるしを見ながら、このように十度もわたしを試みて、わたしの声に聞き従わなかった者たちは、みな、わたしが彼らの先祖たちに誓った地を見ることがない。わたしを侮った者も、みなそれを見ることがない」

⑤ヨシュアとカレブ、そして20歳以下の者を除いて、全員が荒野で死に絶える。

⑥悔い改めれば罪は赦されるが、物理的結果は刈り取らねばならない。

(2) 2歴33:1~20

①マナセ王の時代

②流血、人身供養、神殿の冒瀆

③神は、バビロン捕囚を予告する。

④マナセ王は悔い改め、その罪は赦された。

⑤バビロン捕囚は先に延ばされたが、取り消されることはなかった。

⑥その後、ヨシヤ王という善王が登場したが、バビロン捕囚はやって来た。

(3) マタ12章

①ベルゼブル論争

②何人の人が救われようとも、紀元70年のエルサレム崩壊はやって来る。

③イエスのメシア性を公に拒否したことが原因である。

④エルサレム崩壊までの40年は、神によって用意された「恵みの期間」である。

「イエスの母と兄弟たち」

§ 063 マコ 3 : 31~35、マタ 12 : 46~50、ルカ 8 : 19~21

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① A. T. ロバートソンの調和表は、ここでルカの福音書の順番から外れる。
- ② ルカが最も正確に、イエスの生涯を時間順に記録している。
- ③ ルカが記した順番に注目する必要がある。
 - * ベルゼブル論争が行われた。
 - * ユダヤ人たちは公にイエスのメシア性を拒否した。
 - * この出来事は、イエスの公生涯の分岐点となった。
 - * これ以降、イエスの奉仕の方法が変化した。
 - * イエスは、大衆伝道から弟子訓練に方向転換した。
 - * イエスの奇跡は、弟子訓練のためのものとなった。
 - * イエスの教えは、たとえ話が中心となった。
- ④ この箇所の出来事は、イエスのたとえ話の間に入るべきものである。
 - * マタ 13 章には、たとえ話が多数出て来る。

(2) きょうの箇所は短い箇所であるが、非常に重要な箇所である。

- ① イエスの公生涯の方向性が変化した。
- ② その変化は、私たち異邦人にとって重要な意味を持つ。

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「キリストを連れ戻しに来た母と兄弟たち」 (§ 63)

マコ 3 : 31~35、マタ 12 : 46~50、ルカ 8 : 19~21

2. アウトライン

- (1) 母と兄弟たちの訪問 (46 節)
- (2) 取り次ぐ人々 (47 節)
- (3) イエスの回答 : 否定的な内容 (48 節)
- (4) イエスの回答 : 肯定的な内容 (49~50 節)

3. 結論 :

- (1) 異邦人の救い
- (2) ユダヤ人個人の救い

(3) ユダヤ民族の救い

このメッセージは、神による人類救済計画の流れを学ぶためのものである。

I. 母と兄弟たちの訪問 (46 節)

「イエスがまだ群衆に話しておられるときに、イエスの母と兄弟たちが、イエスに何か話そうとして、外に立っていた」(46 節)

1. イエスの家族がやって来た。

(1) 母マリア

①カトリックの教理

*無原罪の御宿り

*聖母の被昇天

*永遠の処女

②これらの教理は、聖書的ではない。

(2) 兄弟たち

①マリアが生んだ子どもたち

②イエスにとっては、異父兄弟である。

2. どういう目的でやって来たのか。

(1) マコ 3 : 21 からのヒント

「イエスの身内の者たちが聞いて、イエスを連れ戻しに出て来た。『気が狂ったのだ』と言う人たちがいたからである」(マコ 3 : 21)

(2) ヨハ 7 : 5 からのヒント

「兄弟たちもイエスを信じていなかったのである」(ヨハ 7 : 5)

(3) 当時の状況

①ベルゼブル論争によって、イエスと悪霊の関わりの噂が流れた。

②たとえ話の多用によって、イエスが正気かどうか、疑われた。

③イエスの家族たちは、イエスのことを心配した。

*気が狂ったのだろうか。

*休息が必要なのだろうか。

II. 取り次ぐ人々 (47 節)

「すると、だれかが言った。『ご覧なさい。あなたのお母さんと兄弟たちが、あなたに話そうとして外に立っています』」(47 節)

1. イエスの母と兄弟たちは、イエスに近づけなかった。
 - (1) 大ぜいの人が、イエスを囲んで座っていた(マルコの情報)。
 - ①彼らは外に立っていて、人をやり、イエスを呼ばせた。
 - ②マタイではひとりの人が、マルコでは大ぜいの人が、イエスに呼びかけた。
2. ユダヤ的文脈の中では、この取り次ぎは当然のことである。
 - (1) モーセの律法では、両親を敬うことは重要な命令である。
 - ①ユダヤ教の教えでも、両親を敬うことは最も重要な命令であるとされた。
 - ②それゆえ、取り次いだ人たちは、当然のことをしているのである。
 - (2) 紀元1世紀のユダヤ人社会における家族関係を理解することが、重要である。
 - ①その前提のもとに、イエスのことばを聞くと、その革命性がよく分かる。

III. イエスの回答：否定的な内容 (48 節)

「しかし、イエスはそう言っている人に答えて言われた。『わたしの母とはだれですか。また、わたしの兄弟たちとはだれですか』」

1. イエスは、血のつながりを根拠としてイエスに近づくことを、否定された。
 - (1) マリアが他の人になく特権を持っているという考え方は、否定される。
2. パリサイ人たちは、ユダヤ人として誕生したなら、神の国に入れると教えていた。
 - (1) イエスのこのことばは、アブラハムの子孫であるという誇りを粉砕する。
3. イエスの母と兄弟たちは、イスラエルという国全体の象徴である。
 - (1) 公生涯のこの段階で、イエスはイスラエルとの特別な関係を断ち切られた。
 - ①形式的信仰が否定された(マタ12:43~45)。

*イスラエルの後の状態は、以前よりも悪くなる。
 - ②血のつながりが否定された(マタ12:46~50)。

IV. イエスの回答：肯定的な内容 (49~50 節)

「それから、イエスは手を弟子たちのほうに差し伸べて言われた。『見なさい。わたしの母、

わたしの兄弟たちです。天におられるわたしの父のみこころを行う者はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです』(49～50節)

1. 弟子たちに向けたことば

(1) 彼らは、イエスをメシアと信じた人たちである。

①イエスを信じることは、父なる神の御心を行うことである。

(2) 「天におられるわたしの父」

①「天におられる私たちの父」ではない。

②イエスと天の父の特別な関係を示す言葉である。

③三位一体の父と子の関係

2. イエスは、信仰によってイエスに近づくことを肯定された。

(1) ユダヤ人たちの運命

①アブラハム契約のゆえに、彼らが神の民であることは変わらない。

②しかし、不信仰な状態では、神の民としての祝福を受けることができない。

③さらに、神の民であるがゆえに、矯正的裁きを受けることになる。

*裁きは、彼らを信仰に立ち返らせるための訓練である。

(2) 異邦人の運命

①異邦人は、アブラハムの子孫ではない。

②また、イエスと血のつながりはない。

③さらに、種々の契約とは無縁である。

④しかし、信仰によって「神の家族」の一員とされるようになる。

(3) イエスのこのことばには、異邦人伝道への展望がある。

結論

はじめに：イエスのことばには、ホセア書の背景がある。

(1) ホセ1:2

「【主】がホセアに語り始められたとき、【主】はホセアに仰せられた。『行って、姦淫の女をめとり、姦淫の子らを引き取れ。この国は【主】を見捨てて、はなはだしい淫行にふけているからだ』

①【主】が預言者に、不思議な行為をするように命じることがある。

*それは実際の行為であると同時に、象徴的な意味を持つ。

②この命令もそれと同じで、実際の行為であり、かつ象徴的な意味を持つ。

③「姦淫の女」とは、娼婦のことである。

*この時点で、ホセアの妻になる女性は、すでに娼婦となっている。

④「姦淫の子ら」とは、その娼婦の子どもたちである。

*避妊や中絶の知識が希薄な時代である。

*年若い娼婦が、複数の子どもを持つことは珍しくなかった。

*ホセアの妻の場合は、2人以上の子どもを持っていた。

*ホセアは彼らを養子に迎えた。

⑤象徴的な意味

*ホセアは、神を象徴している。

*姦淫の女は、イスラエルの民(北王国)を象徴している。

*姦淫とは、偶像礼拝のことである。

(2) ホセ1:3

「そこで彼は行って、ディブライムの娘ゴメルをめとった。彼女はみごもって、彼に男の子を産んだ」

①娼婦の名前

*ゴメル(完成、完ぺき、という意味)

②父の名前

*ディブライム(いちじくの菓子、という意味)

*この時代、「いちじくの菓子」という言葉には、性的な意味があった。

③「ディブライムの娘ゴメル」

*完ぺきな性欲の満たし、という意味になる。

*彼女の相手になる人は、満足するということ。

*偶像にとっては、イスラエルの民ほど好都合な民はない。

(3) ゴメルがホセアに生んだ子どもたち

①男の子 イズレエル

*イズレエルの谷を象徴する名前

②女の子 ロ・ルハマ

*「恵みはない」という意味

*イスラエルの民は、契約の民としての祝福を受けることができなくなる。

③男の子 ロ・アミ

「主は仰せられた。『その子をロ・アミと名づけよ。あなたがたはわたしの民ではなく、わたしはあなたがたの神ではないからだ』(1:9)

* 「私の民ではない」という意味

* 神との関係が断絶した。

* イエスが血の関係を否定された時、ホセ1:9の預言が成就した。

* イスラエルの民は、「ロ・アミ」とされた。

(4) しかし、将来の回復が預言されている。

「イスラエル人の数は、海の砂のようになり、量ることも数えることもできなくなる。彼らは、『あなたがたはわたしの民ではない』と言われた所で、『あなたがたは生ける神の子らだ』と言われるようになる」(ホセ1:10)

①断絶と回復が、ホセア書のテーマである。

②終わりの時代に、ホセ1:10が成就する。

1. 異邦人の救い

(1) 私たちは、契約の民でなかったが、信仰と恵みによって神の子とされた。

(2) ロマ9:24~26

「神は、このあわれみの器として、私たちを、ユダヤ人の中からだけでなく、異邦人の中からも召してくださったのです。それは、ホセアの書でも言っておられるとおりです。『わたしは、わが民でない者をわが民と呼び、愛さなかった者を愛する者と呼ぶ。「あなたがたは、わたしの民ではない」と、わたしが言ったその場所で、彼らは、生ける神の子どもと呼ばれる』」

2. ユダヤ人個人の救い

(1) ユダヤ人の中からもイエスをメシアと信じる者が起こされた。

(2) 1ペテ2:9~10

「しかし、あなたがたは、選ばれた種族、王である祭司、聖なる国民、神の所有とされた民です。それは、あなたがたを、やみの中から、ご自分の驚くべき光の中に招いてくださった方のすばらしいみわざを、あなたがたが宣べ伝えるためなのです。あなたがたは、以前は神の民ではなかったのに、今は神の民であり、以前はあわれみを受けない者であったのに、今はあわれみを受けた者です」

3. ユダヤ民族の救い

(1) 現在のユダヤ人伝道は、個人としての救いをもたらすものである。

(2) ユダヤ民族の救いは、終末時代に成就する。

(3) ゼカ13:9

「わたしは、その三分の一を火の中に入れ、銀を練るように彼らを練り、金をためす

ように彼らをためす。彼らはわたしの名を呼び、わたしは彼らに答える。わたしは『これはわたしの民』と言ひ、彼らは『【主】は私の神』と言う」

まとめ

- (1) ユダヤ人が、全人類を救うために、神の民として召された。
- (2) しかし彼らは、不信仰のゆえに、「ロ・アミ」となった。
- (3) 信仰によって、異邦人が「神の民」とされるようになった。
- (4) と同時に、ユダヤ人個人も、信仰によって「神の民」とされる。
- (5) ユダヤ民族全体が「神の民」となるのは、大患難時代の終わりの時点である。

「たとえ話で教えるイエス」

§ 064 マコ 4:1~2、マタ 13:1~3a、ルカ 8:4

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベルゼブル論争以降、イエスの奉仕の方法が変化した。
- ②イエスは、大衆伝道から弟子訓練に方向転換した。
- ③イエスの奇跡は、弟子訓練のためのものとなった。
- ④イエスの教えは、たとえ話を中心となった。

(2) たとえ話の内容の解説に入る前に、理解しておくべき情報がたくさんある。

- ①メッセージの中の例話の役割：全体との関わりが重要である。
- ②マタ 13章のたとえ話は、全体としてひとつのまとまりを持ったものである。
- ③その内容は、私たち異邦人にとって重要な意味を持つ。

(3) 「その日」(マタ 13:1)

- ①ユダヤ人たちがイエスのメシア性を拒否した日
- ②イエスが血による関係を拒否し、信仰による関係を認めた日
- ③イエスの教え方が変化している。

「すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。『なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか?』」(マタ 13:10)

(4) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群 - インTRODakション -」 (§ 64)

2. アウトライン

- (1) たとえ話とは何か。
- (2) なぜたとえ話で語るのか。
- (3) 一連のたとえ話の主要テーマは何か。

3. 結論：現代に生きる私たち異邦人クリスチャンにとって、どういう意味があるのか。

このメッセージは、たとえ話群を理解するためのINTRODUCTIONである。

I. たとえ話とは何か。

1. ギリシア語で「パラボレイ」である。

- ①パラ+バロウ(そばに投げる、並べて置く)
- ②「2つのものを並べて置き、対比させる」という意味である。

2. 日常生活で起こる事例を取り上げ、霊的、道徳的真理を教えること。

- ①現実の体験(知っていること)と霊的真理(知らないこと)の対比である。
- ①寓話(寓喩)とは異なる。
- ②寓話の場合は、現実には起こらない内容が語られる。

3. たとえ話の例として、3つのものを上げる。

(1) 直喩

「天の御国は、からし種のようなものです」(マタ13:31)

「天の御国は、パン種のようなものです」(マタ13:33)

「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです」(マタ13:44)

「天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです」(マタ13:45)

「天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです」
(マタ13:47)

- ①「〇〇のようなもの」という言葉があるので、対比が明確に分かる。

(2) 隠喩

「わたしはいのちのパンです」(ヨハ6:48)

「わたしは、世の光です」(ヨハ8:12)

「わたしは、良い牧者です」(ヨハ10:14)

「わたしはぶどうの木で、あなたがたは枝です」(ヨハ15:5)

- ①「〇〇のようなもの」という言葉がないので、対比が隠されている。
- ②隠喩の方が直喩よりもパンチが効いている。

(3) 物語

- ①好例が、良きサマリヤ人のたとえ話である。
- ②再度言うが、現実の生活から取られた題材が語られる。

II. なぜたとえ話で語るのか。

1. 群衆に対しては、霊的真理を隠すため。

「たとえ話で教えるイエス」

①内容は、余りにも日常的で、当然のことである。

②それゆえ、霊的真理にまで思いが至らない。

2. 弟子たちに対しては、霊的真理を教えるため。

(1) この教授法は、弟子たちにも理解が困難であった。

「たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた」(マコ4:34)

①弟子たちには、たとえ話の意味が内輪の話として解説された。

(2) ユダヤ人たちが「赦されない罪」を犯して以降、イエスの教え方は変化した。

3. メシア預言の成就のため。

(1) マタ13:34~35

「イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話され、たとえを使わずには何もお話しにならなかった。それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。『わたしはたとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語ろう』」

(2) イザ6:9~10

「行って、この民に言え。『聞き続けよ。だが悟るな。見続けよ。だが知るな。』この民の心を肥え鈍らせ、その耳を遠くし、その目を堅く閉ざせ。自分の目で見ず、自分の耳で聞かず、自分の心で悟らず、立ち返っていやされることのないように」

Ⅲ. 一連のたとえ話のテーマは何か。

はじめに

(1) 一連のたとえ話は、まとまりのあるユニットとして理解する必要がある。

①バプテスマのヨハネもイエスも、神の国(天の御国)の到来について告げた。

②これは千年王国のことである。

③しかし、ユダヤ人たちはイエスのメシア性を拒否した。

④従って、神の国の計画は変更を余儀なくされた。

(2) マタイが「神の国」ではなく「天の御国」という言葉を使う理由

①ユダヤ人たちは、神の御名を口にするのを嫌った。

②今でもこの習慣は続いている。

*アドナイ、ハシエム、アドシエム、G-d

③「神の国」(Kingdom of God)と「天の御国」(Kingdom of Heaven)は、同じ意味である。

(3) マタ 13 : 10~11

「すると、弟子たちが近寄って来て、イエスに言った。『なぜ、彼らにたとえでお話しになったのですか。』イエスは答えて言われた。『あなたがたには、天の御国の奥義を知ることが許されているが、彼らには許されていません』」

①イエスがたとえ話によって語っているのは、「天の御国の奥義」である。

②「奥義」とは、旧約聖書には啓示されていなくて、新約聖書になって初めて啓示された真理である。

③一連のたとえ話が扱っているテーマは、「奥義としての王国」である。

*新約時代になって初めて啓示された王国なので、この名称が付けられた。

(4)「神の国」の計画の全貌を理解する必要がある。

①「神の国」には、5つの異なった意味がある。

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」(マタ 6 : 33)

②この聖句の「神の国とその義」とは、なんのことか。

1. 永遠の王国—普遍的王国

(1) 神は常に、ご自身の権威をもって世界の流れを支配しておられる。

①神の御心から外れて何かが起こることは、あり得ない。

②神の御心には2種類ある。

*積極的御心

*消極的御心 (アダムの墮落)

(2) 神の支配は、2つの面に及んでいる。

①時間的側面：永遠の王国

②空間的側面：普遍的王国

(3) 1 歴 29 : 11~12

「【主】よ。偉大さと力と栄えと栄光と尊厳とはあなたのものです。天にあるもの地にあるものはみなそうです。【主】よ。王国もあなたのものです。あなたはすべてのものの上に、かしらとしてあがむべき方です。富と誉れは御前から出ます。あなたはすべ

てのものの支配者であられ、御手には勢いと力があり、あなたの御手によって、すべてが偉大にされ、力づけられるのです」

2. 霊的な王国

- (1) 信者の心に神の支配が宿っていることである。
 - ① アダムから歴史の終わりに至るまでの、すべての信者を含む概念である。
 - ② 信者以外の者は含まれていない。

(2) 霊的な王国と教会の関係

- ① 今の時代は教会時代である。
- ② この時代においては、霊的な王国と教会とは同じ意味である。
- ③ しかし、霊的な王国は、教会がなくても存在する。
 - * ペンテコステと携挙の間だけ、霊的な王国と教会が合致する。
 - * この場合の教会とは、地域教会ではなく、普遍的教会である。
- ④ 霊的な王国は、永遠の秩序にまで及ぶ。

(3) マタ 6 : 33

「だから、神の国とその義とをまず第一に求めなさい。そうすれば、それに加えて、これらのものはすべて与えられます」

3. 神政政治の王国

- (1) イスラエルに対する神の支配のことである。
 - ① シナイ山でモーセの律法を受けた時に、これが設立された。
 - ② この時点で、イスラエルの民からイスラエルという国に変化した。

(2) 初期の段階

- ① 神は、仲介者を通してイスラエルを支配した。
- ② モーセ、ヨシュア、士師たち、最後にサムエル

(3) 後期の段階

- ① ダビデの家を通してイスラエルを支配した。
- ② ゼデキヤが最後の王となった (バビロン捕囚)。
- ③ 神政政治の王国の崩壊と、預言者の活動には相関関係がある。
 - * 預言者たちは、「メシア的王国」について預言するようになった。

(4) 異邦人の時代

- ①神政政治の王国が崩壊して以降、異邦人の時代に入った。
- ②イエスがダビデの家の王として王座に着くまで、異邦人の時代が続く。

(5) 聖句

- ①聖書箇所は、出 20 章から 2 歴 36 章まで。

4. 奥義としての王国

(1) ユダヤ人によるメシア拒否から始まり、メシアの受容で終わる。

- ①旧約聖書に預言されていなかったのもので、「奥義」である。

(2) 真の信者と偽りの信者を含む。

- ①キリスト教世界という言葉がもっともふさわしい。
- ②英語で「Christendom」という。
- ③キリスト教圏の国々を指す言葉である。
- ④教会にも、聖書的教会と真理から逸脱した教会がある。

(3) メシアが王として再臨されるまでの地上の状態を描写している。

- ①一時的な王国である。
- ②麦と毒麦がともに成長する。

(4) 聖句

- ①エペ 3 : 1~10
- ②コロ 1 : 25~27

(5) 一連のたとえ話は、奥義としての王国のさまざまな側面を描写するものである。

5. メシア的王国 (千年王国)

(1) メシアの再臨後に、地上に成就する。

- ①ダビデの家の王として、メシアがエルサレムから世界を直接統治する。
- ②メシア的王国は、旧約聖書の預言のピークである。

(2) 黙 20 : 6

「この第一の復活にあずかる者は幸いな者、聖なる者である。この人々に対しては、第二の死は、なんの力も持っていない。彼らは神とキリストとの祭司となり、キリス

トとともに、千年の間王となる」

結論：現代に生きる私たち異邦人クリスチャンにとって、どういう意味があるのか。

1. 励まし

(例話) ゴラン高原に上る道路。上には、見晴し台がある。

2. 展望

①奥義としての王国は一時的。

②千年王国が到来する。

③霊的な王国は永遠に続く。

3. 伝道の動機

①千年王国の市民となる祝福

②霊的な王国に参加することの祝福

③この祝福に入る唯一の方法は、回心による霊的再生である。

「種蒔く人のたとえ」

§064 マコ4:3~23、マタ13:3~23、ルカ8:5~18

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベルゼブル論争以降、イエスの奉仕の方法が変化した。
- ②イエスは、大衆伝道から弟子訓練に方向転換した。
- ③イエスの奇跡は、弟子訓練のためのものとなった。
- ④イエスの教えは、たとえ話を中心となった。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ①種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ②種のたとえ
- ③毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④からし種のたとえ
- ⑤パン種のたとえ
- ⑥畑に隠された宝のたとえ
- ⑦高価な真珠のたとえ
- ⑧網のたとえ
- ⑨一家の主人のたとえ

(3) これらのたとえ話を解釈する際の原則

- ①イエスが弟子たちに、「奥義としての王国」の進展について教えた。
- ②多くの象徴が用いられているが、その大半が旧約聖書ですでに用いられていた。
*その場合は、その解釈をそのまま採用する。
- ③新しく登場する象徴は、イエス自身が解説される。

(4) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§64)

2. アウトライン

- (1) 種蒔く人のたとえ (3~9節)
- (2) たとえ話で語る理由 (10~13節)
- (3) 種蒔く人のたとえの解説 (14~20節)

3. 結論：私たちへの適用 (21～23 節)

このメッセージは、種蒔く人のたとえを理解し、適用するためのものである。

I. 種蒔く人のたとえ (3～9 節)

1. 最も重要なたとえ話である。

(1) 注意を喚起する言葉が、最初と最後に出て来る。

「よく聞きなさい」(3 節 a)

「耳のある者は聞きなさい」(9 節)

(2) その理由

①種蒔く人のたとえが、最も重要なものである。

②意味は鮮明ではないが、そこには深い真理が隠されている。

③霊的真理に関心を払って聞くなら、理解できるようになる。

2. 4 種類の土地

(1) 道ばた (3b～4 節)

「種を蒔く人が種蒔きに出かけた。蒔いているとき、種が道ばたに落ちた。すると、鳥が来て食べてしまった」

①ある種は道ばたに落ちた。

②マコ 2 : 23 には、麦畑の中にある道が登場する。

「ある安息日のこと、イエスは麦畑の中を歩いて行かれた。すると、弟子たちが道々穂を摘み始めた」

③人が歩いた結果、踏み固められた道である。

④その種が地中に根を張ることはない。

⑤その種は、鳥の餌になる。

(2) 岩地 (5～6 節)

「また、別の種が土の薄い岩地に落ちた。土が深くなかったため、すぐに芽を出した。しかし日が上ると、焼けて、根がないために枯れてしまった」

①ある種は岩地に落ちた。

②見た目には他の地と変わらないが、土壌が薄い。

③石灰岩の地層の上に、土壌が薄くかぶさっている状態である。

④この地層では根は深く張ることができない。

⑤日が上ると、枯れてしまう。

「種蒔く人のたとえ」

(3) いばらの地 (7 節)

「また、別の種がいばらの中に落ちた。ところが、いばらが伸びて、それをふさいでしまったので、実を結ばなかった」

- ①別の種は、いばらが群生する地に落ちた。
- ②いばらには生命力がある。
- ③いばらは、他の植物が必要とする水や光をさえぎり、それらをふさぐ。
- ④その結果、いばらの中では実を結ぶことができなくなる。

(4) 良い地 (8 節)

「また、別の種が良い地に落ちた。すると芽ばえ、育って、実を結び、三十倍、六十倍、百倍になった」

- ①良い地に落ちた種は、実を結ぶ。
- ②当時のパレスチナでは、10 倍の収穫があれば、良い収穫とされた。
*種を1粒蒔けば、10粒の収穫がある。
- ③30倍、60倍、100倍の収穫は、大収穫である。

II. たとえ話で語る理由 (10～13 節)

1. 弟子たちの疑問 (10 節)

「さて、イエスだけになったとき、いつもつき従っている人たちが、十二弟子とともに、これらのたとえのことを尋ねた」

(1) 質問したのは、12 弟子と他の信者たち

- ①イエスが急にたとえ話で教えるようになったので、説明を求めた。

(2) 質問の内容

- ①たとえ話全般について (10 節では複数形である)
- ②特に、種蒔く人のたとえ (13 節では単数形である)

2. イエスの答え (11～12 節)

「そこで、イエスは言われた。『あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです。それは、「彼らは確かに見るには見るがわからず、聞くには聞くが悟らず、悔い改めて赦されることのないため」です』」

(1) 3つの理由 (前回すでに学んだ)

- ①群衆から、真理を隠すため。

*彼らはすでに、多くの特権に与ってきた。

「種蒔く人のたとえ」

- ②弟子たちに、真理をより詳しく教えるため。
- ③メシア預言の成就のため。

(2) 「神の国の奥義」(チャート参照)

- ①私たちはこれを、「奥義としての王国」と呼んだ。
- ②ユダヤ人たちがイエスを拒否して以降登場した御国である。
- ③イエスを信じる者は、霊的な意味ですでに御国に入っている。
- ④しかし、王であるキリストが地上にいない間は、「奥義としての王国」である。
- ⑤それは、信者と未信者をともに含む概念である。
- ⑥「奥義としての王国」は、普遍的教会と同じではない。
- ⑦普遍的教会は、その中に含まれる。
- ⑧「奥義としての王国」は、ユダヤ人たちがイエスを信じる時まで続く。
- ⑨つまり、一連のたとえは、メシアが再臨するまでの地上の状態を教えている。

3. 種蒔く人のたとえの重要性(13節)

(1) 訳文の比較

「そして彼らにこう言われた。『このたとえがわからないのですか。そんなことで、
いったいどうしてたとえの理解ができればしょう』(新改訳)

「また、イエスは言われた。『このたとえが分からないのか。では、どうしてほかの
たとえが理解できるだろうか』(新共同訳)

(2) イエスは、弟子たちの無知に驚かれた。

- ①種蒔く人のたとえは、最も単純である。
- ②と同時に、これが他の8つのたとえ話を解釈する土台となる。
- ③もしこれが分からないなら、より複雑なたとえ話が分かるはずがない。

(例話) 数独の上級本

III. 種蒔く人のたとえの解説(14~20節)

「種蒔く人は、みことばを蒔くのです。みことばが道ばたに蒔かれるとは、こういう人たちのことす——みことばを聞くと、すぐサタンが来て、彼らに蒔かれたみことばを持ち去ってしまうのです。同じように、岩地に蒔かれるとは、こういう人たちのことす——みことばを聞くと、すぐに喜んで受けるが、根を張らないで、ただしばらく続くだけです。それで、みことばのために困難や迫害が起こると、すぐにつまずいてしまいます。もう一つの、いばらの中に種を蒔かれるとは、こういう人たちのことす——みことばを聞いてはいるが、世の心づか

いや、富の惑わし、その他いろいろな欲望が入り込んで、みことばをふさぐので、実を結びません。良い地に蒔かれるとは、みことばを聞いて受け入れ、三十倍、六十倍、百倍の実を結ぶ人たちです」

1. 象徴的言葉

(1) 種とは、みことばのことである。

①イエスがそれを解説された。

(2) 種蒔く人が誰かは解説されていないが、それは容易に推察される。

①イエスご自身

②イエスの代理人としての弟子たち

③奥義としての御国に住むすべての信者たち

2. 4つの土地の意味

(1) 道ばた

①不信仰な人の応答

②福音を聞いても、信じないことを選ぶ人たち。

③福音の真理は、自分の生活には無関係であると考えた人たち。

④鳥=サタン

(2) 岩地

①この人たちは信じるが、みことばに根差した信仰を持たない。

②信者ではあるが、みことばの乳から堅い肉に進もうとしない人たち。

③体験主義的信仰が中心で、みことばの真理を学ぼうとしない人たち。

④困難や迫害が来ると、容易につまずく人たち。

(3) いばらの地

①この人たちは信じるが、霊的勝利を自分のものにできない。

②みことばを知っているかもしれないが、それを自分の人生に適用できない。

③信仰生活と、この世の生活とが、別区分になっている。

④信仰以上に大切にしている偶像がある。

*富、健康、快樂、名声、幸福

⑤(2)と(3)の信者は救われているが、霊的成長を経験しない。

(4) 良い地 (8節)

①みことばに根差した信仰を持つ人たち。

- ②聖書研究をし、その結果学んだ真理が、自分の判断と行動の規準となる。
- ③彼らの存在は周りの人たちに良い影響を与、多くの魂が救いに導かれる。

結論：

1. 奥義としての王国は、永遠ではなく、一時的なものである。
 - (1) ユダヤ人たちがイエスを拒否した結果入って来た、中間期である。
 - (2) 旧約聖書には預言されていなかったのので、「奥義」という。
2. 奥義としての王国は、信者と未信者を含む。
 - (1) 本物の信者と、偽物の信者が同居している。
 - (2) 教会レベルでも、同じことが言える。
 - (3) さらに、異端の出現も予想されている。
3. 奥義としての王国は、教会（普遍的教会）とは区別されるものである。
 - (1) 教会はその一部である。
4. 奥義としての王国の特徴は、福音の伝達が行われることである。
 - (1) ユダヤ教には、宣教師はいない。
 - ①異邦人がユダヤ人のところに来るという考え方がある。
 - ②求心力的伝道
 - (2) キリスト教は、その最初から伝道的である。
 - ①種蒔く人のたとえの通りである。
 - ②遠心力的伝道
 - (3) しかし、福音に対する応答は、さまざまである。
 - ①種蒔く人のたとえは、4種類の応答が起こることを教えている。
5. 福音の真理を知った者には、それを伝える責務がある。

「また言われた。『あかりを持って来るのは、枘の下や寝台の下に置くためでしょうか。燭台の上に置くためではありませんか。隠れているのは、必ず現れるためであり、おおい隠されているのは、明らかにされるためです。聞く耳のある者は聞きなさい』」(21～23節)

 - (1) 「あかり」とは、福音の真理である。
 - (2) それを燭台の上に置くのが、私たちの使命である。
 - (3) 私たちの働きが忠実なものであったかどうかは、終わりに日に明らかになる。
 - (4) 私たちの責任範囲は、種を蒔くところまでである。

「種のたとえ、毒麦のたとえ」

§ 064 マコ4:26~29、マタ13:24~30、マタ13:36~43

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ベルゼブル論争以降、イエスの奉仕の方法が変化した。
- ②イエスの教えは、たとえ話を中心となった。
- ③群衆から真理を隠すため。
- ④弟子たちに真理を教えるため。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ①種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ②種のたとえ
- ③毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④からし種のたとえ
- ⑤パン種のたとえ
- ⑥畑に隠された宝のたとえ
- ⑦高価な真珠のたとえ
- ⑧網のたとえ
- ⑨一家の主人のたとえ

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§ 64)

2. アウトライン

- (1) 種のたとえ (マコ4:26~29)
- (2) 毒麦のたとえ (マタ13:24~30)
- (3) 毒麦のたとえの解説 (マタ13:36~43)

このメッセージは、種のたとえと毒麦のたとえを理解し、適用するためのものである。

I. 種のたとえ (マコ4:26~29)

はじめに (特徴)

- (1) これは、マルコの福音書だけに出て来るたとえ話である。
- (2) 「奥義としての王国をあるものにたとえると、次のようになる」という意味。

「種のたとえ、毒麦のたとえ」

- (3) 3つの段階が紹介されている。
 - ①種を蒔く段階
 - ②その種が成長する段階
 - ③実を収穫する段階
- (4) 3つの段階すべてに「種を蒔く人」が登場している。
- (5) 第2の段階に強調点が置かれている。

1. 種を蒔く段階 (26節)

「また言われた。『**神の国は、人が地に種を蒔くようなもので、**』」 (26節)

- (1) 人が地に種を蒔く。
 - ①「蒔かぬ種は生えぬ」(上方いろはかるた)
 - ②「Pluck not where you never planted. (植えなかった場所で摘むな)」

- (2) 種とは、みことばのことである。
 - ①種にはいのちが宿っている。
 - ②奥義としての王国は、みことばの種を蒔く時代である。

- (3) 種を蒔く人
 - ①誰であるかは明示されていない。
 - ②種を蒔く人は、能動的である。

2. その種が成長する段階 (27～28節)

「**夜は寝て、朝は起き、そうこうしているうちに、種は芽を出して育ちます。どのようにしてか、人は知りません。地は人手によらず実をならせるもので、初めに苗、次に穂、次に穂の中に実が入ります**」 (27～28節)

- (1) 種を蒔く人
 - ①この段階にも登場するが、受動的である。
 - ②種の成長に関しては、無知である。

- (2) 訳文の比較
 - 「地は人手によらず実をならせるもので、」(新改訳)
 - 「土はひとりでに実を結ばせるのであり、」(新共同訳)
 - 「地はおのずから実を結ばせるもので、」(口語訳)
 - ①ギリシア語で「オートマトス」である。
 - ②土地の力ではなく、種のいのちを表現している。

③種は、誰が蒔いたかに関係なしに成長する。

(3) 使 12 : 10

「彼らが、第一、第二の衛所を通り、町に通じる鉄の門まで来ると、門がひとりで開いた。そこで、彼らは外に出て、ある通りを進んで行くと、御使いは、たちまち彼を離れた」

(4) テト 3 : 5~7

「神は、私たちが行った義のわざによってではなく、ご自分のあわれみのゆえに、聖霊による、新生と更新との洗いをもって私たちを救ってくださいました。神は、この聖霊を、私たちの救い主なるイエス・キリストによって、私たちに豊かに注いでくださったのです。それは、私たちがキリストの恵みによって義と認められ、永遠のいのちの望みによって、相続人となるためです」

①神秘的な芽生えと成長は、聖霊による新生と成長を表している。

②成長もまた、聖霊の業である。

3. 収穫の段階 (29 節)

「実が熟すると、人はすぐにかまを入れます。収穫の時が来たからです」 (29 節)

(1) 種を蒔く人は、収穫を目的にそうするのである。

①収穫の時とは、世の終わりの時である。

(2) イエスの終末理解

①ユダヤ人たちは、突然登場する神の国への期待感を持っていた。

②イエスは、種蒔きから始める方法を提唱された。

③個人的救いと成長は、みことばの種を蒔くところから始まる。

④地球的レベルでも、同じことが起こる。

⑤少数の弟子たちから始まり、最後は「収穫の時」に至る。

4. 適用

(1) 本物の種を蒔く。

「しかし、私たちであろうと、天の御使いであろうと、もし私たちが宣べ伝えた福音に反することをあなたがたに宣べ伝えるなら、その者はのろわれるべきです。私たちが前に言ったように、今もう一度私は言います。もしだれかが、あなたがたの受けた福音に反することを、あなたがたに宣べ伝えているなら、その者はのろわれるべきです」 (ガラ 1 : 8~9)

(2) 成長は神に委ねる。

「私が植えて、アポロが水を注ぎました。しかし、成長させたのは神です。それで、たいせつなのは、植える者でも水を注ぐ者でもありません。成長させてくださる神なのです。植える者と水を注ぐ者は、一つですが、それぞれ自分自身の働きに従って自分自身の報酬を受けるのです」(1コリ3:6~8)

(例話) ビリー・グラハムの伝道

II. 毒麦のたとえ (マタ 13 : 24~30)

1. 奥義としての王国の特徴

(1) ある人が自分の畑に良い種を蒔いた。

①その人は、収穫を期待している。

②ところが、敵が夜中にやって来て、麦の中に毒麦を蒔いて行った。

*毒麦とは、ギリシア語で「ジザニア」。

*いね科の *Lolium temulentum*。

*明治の初め日本にも入って来た。

*これ自体には毒はないが、麦に混入すると苦い味がする。

(2) 麦と毒麦は、ともに成長の段階を通過している。

①麦と毒麦の見分けがつかない段階である。

②しもべたちは、自分たちで毒麦を抜き集めましょうかと提案する。

(3) 主人の判断

「いやいや、毒麦を抜き集めるうちに、麦もいっしょに抜き取るかもしれない。だから、収穫まで、両方とも育つままにしておきなさい。収穫の時期になったら、私は刈る人たちに、まず、毒麦を集め、焼くために束にしなさい。麦のほうは、集めて私の倉に納めなさい、と言いましょう」(29~30節)

①収穫の時期になると、区別は容易になる。

②毒麦が先に集められ、束にして焼かれる。

③毒麦がなくなった畑で、麦が収穫され、倉に納められる。

III. 毒麦のたとえの解説 (マタ 13 : 36~43)

1. イエスが象徴的言葉の意味を解き明かされる。

- ①弟子たちが質問をした。
- ②詳細な説明があるのは、「種蒔く人のたとえ」と「毒麦のたとえ」の2つである。

2. 象徴的言葉

「良い種を蒔く者は人の子です。畑はこの世界のことで、良い種とは御国の子どもたち、毒麦とは悪い者の子どもたちのことです。毒麦を蒔いた敵は悪魔であり、収穫とはこの世の終わりのことです。そして、刈り手とは御使いたちのことです。ですから、毒麦が集められて火で焼かれるように、この世の終わりにもそのようになります」(37～40節)

- (1) 良い種を蒔く者は、メシアご自身である。
 - ①メシアが地上からいなくなると、弟子たちがその働きを継続する。
 - ②弟子たちがいなくなると、それ以降の信者たちがそれを行う。

- (2) 畑は、この世界のことである。
 - ①世界宣教が預言されている。

- (3) 良い種とは新生体験をした信者たち、毒麦とは偽の信者たちである。
 - ①ここで、象徴的意味が変化している。
 - ②真の信者もそうでない者も、ともに育っていく。
 - ③この真理は、旧約聖書には啓示されていない。
 - *旧約聖書が預言する神の国は、悪が存在しない信者だけの世界である。
 - *良い種と毒麦がともに育つのは、奥義としての王国の特徴である。

- (4) 毒麦を蒔いた敵とは、悪魔である。
 - ①悪魔は、偽の福音の種を蒔く。
 - ②悪魔は、偽の信者を育てる。
 - ③これらの行為を、隠れて行う。

- (5) 収穫とは、この世の終わりのことである。
 - ①御使いたちが毒麦を集め、それを火で焼く。
 - ②これは、終末の裁きを指している。
 - ③毒麦とは、罪人一般のことではない。
 - ④信者のようであるが、信者ではない人のことである。

3. 適用

「人の子はその御使いたちを遣わします。彼らは、つまずきを与える者や不法を行う者た

ちをみな、御国から取り集めて、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ぎしりするのは、そのとき、正しい者たちは、彼らの父の御国で太陽のように輝きます。
耳のある者は聞きなさい」(41～43節)

(1) 奥義としての王国の理解を深めよう。

- ①ユダヤ人たちがメシアを拒否してから、メシアが再臨されるまでの間のこと。
- ②大雑把に言うと、メシアの初臨と再臨の間のこと。
- ③メシアは地上にいらなくても、王国は続く。
- ④教会時代とほぼ同じ意味であるが、教会時代よりも少し長い。
- ⑤真の信者と偽の信者がともに存在する時代である。
- ⑥真の教会と偽の教会がともに存在する時代である。
- ⑦「教会なのはどうして〇〇なのですか」という問い
 - * 奥義としての王国では、これが当然である。
 - * 教会の中に偽者がいるのは、悲しいことである。
 - * しかし、信仰者を追い出すのは、もっと悲しいことである。

(2) 終末論の理解を深めよう。

- ①「世の終わり」(40節)とは、奥義としての王国が終了する時である。
- ②ユダヤ人たちがイエスをメシアとして信じ、メシアが再臨される時である。
- ③それまでは、本物と偽物を区別するのが難しい時代である。
- ④この期間は、福音による普遍的勝利が実現しない時代である。
 - * 無千年王国説は誤りである。
 - * キリストが地上で王として統治することはない。
- ⑤メシアの再臨の時、毒麦の人たちは裁きの時を迎える。
 - * 「泣いて」とは、精神的な悲しみである。
 - * 「歯ぎしりする」とは、肉体的な苦痛である。
- ⑥信仰による義人は、千年王国で太陽のように輝く。

「からし種のたとえ、パン種のたとえ」

§ 064 マコ 4 : 30~32、マタ 13 : 33~35

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ① イエスの教えは、たとえ話を中心となった。
- ② 9つのたとえ話のテーマは、「奥義としての王国」である。
- ③ チャートで「奥義としての王国」の意味を確認する。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ① 種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ② 種のたとえ
- ③ 毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④ からし種のたとえ
- ⑤ パン種のたとえ
- ⑥ 畑に隠された宝のたとえ
- ⑦ 高価な真珠のたとえ
- ⑧ 網のたとえ
- ⑨ 一家の主人のたとえ

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§ 64)

2. アウトライン

- (1) からし種のたとえ (マコ 4 : 30~32)
- (2) パン種のたとえ (マタ 13 : 33)
- (3) たとえで話す理由 (マタ 13 : 34~35)

3. 結論 : 現代への適用

このメッセージは、からし種のたとえとパン種のたとえを理解し、適用するためのものである。

I. からし種のたとえ (マコ 4 : 30~32)

1. 30節

「また言われた。『神の国は、どのようなものと言えよ。何にたとえたらよ

いでしょう』

(1) 2重の質問

- ①弟子たちは、いくつかのたとえ話とその解き明かしを聞いてきた。
- ②ここでイエスは、弟子たちに考えるチャンスを与えている。
- ③弟子たちは、「奥義としての王国」の性質について考え始める。

(2) イエスのたとえ話は、弟子たちが想像したものとは大いに異なる。

- ①種のたとえでは、奥義としての王国は「種蒔き」から始まることが示された。
- ②これは、当時のユダヤ人たちが抱いていた神の国のイメージとは異なる。
- ③今回は、種の中でも特に小さい「からし種」が取り上げられる。

2. 31節

「それはからし種のようなものです。地に蒔かれるときには、地に蒔かれる種の中で、一番小さいのですが、」

(1) からし種

- ①「からし種」がなんであるか、学者の間に論争がある。
- ②恐らく「黒胡椒」であろう。
- ③イエス時代、最も小さな種として知られていた。
*からし種1グラムの中に725~760粒の種がある。
- ④胡椒は調味料として、また油を搾る種として珍重された。

(2) 「地に蒔かれる種の中で、一番小さい」

(例話) この言葉を聞いて、聖書の靈感に疑いを持った人がいる。

- ①ヘブル的には、「からし種」は格言的言葉で、最も小さなものを象徴している。
- ②イエスは、誇張法を用いて話している。
- ③「奥義としての王国」の始まりは、実を取るに足りないものである。
- ④イエスの弟子たちは、少数であった。
- ⑤イエスの教えは、この世の価値観とは正反対のものであった。

3. 32節

「それが蒔かれると、生長してどんな野菜よりも大きくなり、大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります」

(1) からし種は、木ではない。

- ①日本語聖書では、「野菜」と訳されている。
- ②ギリシア語では「ラカノン」である。灌木、ハーブ。

- ③木ではないが、木のように枝を張る。
 - ④一年生植物である。
- (2) 「生長してどんな野菜よりも大きくなり、」
- ①パレスチナでは、3.5～4.5メートルにもなるものがある。
- (3) 「大きな枝を張り、その陰に空の鳥が巣を作れるほどになります」
- ①野生の鳥がその枝に宿るようになる。
 - ②小さな始まりが、大きな結果につながることを教えている。

4. 空の鳥とは何か

- (1) マコ4:13

「このたとえがわからないのですか。そんなことで、いったいどうしてたとえの理解ができればしょう」

- ①種蒔く人のたとえが、それ以外のたとえ話を解釈する基準である。
 - ②鳥(複数形)とは、サタンや悪霊の象徴であった。
 - ③それと同じ解釈をする必要がある。
- (2) 生長したからし種は、「奥義としての王国」である。
- ①小さな始まりと、大きな生長が、その特徴である。
 - ②それは、キリスト教界を意味する(本物の教会と偽の教会が混在する)。
- (3) 空の鳥(複数形)は、サタンや悪霊の象徴である。
- ①福音の真理を否定するカルトや異端が、空の鳥である。

II. パン種のたとえ(マタ13:33)

1. 33節

「イエスは、また別のたとえを話された。『天の御国は、パン種のようなものです。女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れて、全体がふくらんで来ます』」

2. 女という言葉は、宗教的存在を象徴している。

- (1) これは、聖書全体で使用されている象徴である。
- (2) 良い意味での象徴
 - ①イスラエルは、「ヤハウエの妻」である。

②教会は、「キリストの花嫁」である。

(3) 悪い意味での象徴

①黙 2 : 20

「しかし、あなたには非難すべきことがある。あなたは、イゼベルという女をなすがままにさせている。この女は、預言者だと自称しているが、わたしのしもべたちを教えて誤りに導き、不品行を行わせ、偶像の神にささげた物を食べさせている」

*イゼベルという名の偽女預言者

②黙 17 : 1~2

「また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。『ここに来なさい。大水の上にはすわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです』」

*統一化された偽の教会

3. パン種という言葉は、罪を象徴している。

(1) 種なしパンの祭りでは、7日間パン種を家から取り除く(出 12 : 15)。

①ユダヤ人たちは、その意味を理解した。違反者は共同体から追放された。

(2) マタ 16 : 6

「イエスは彼らに言われた。『パリサイ人やサドカイ人たちのパン種には注意して気をつけなさい』」

(3) マタ 16 : 12

「彼らはようやく、イエスが気をつけよと言われたのは、パン種のことではなくて、パリサイ人やサドカイ人たちの教えのことであることを悟った」

(4) マコ 8 : 15 には、「ヘロデのパン種」という言葉が出て来る。

(5) 1 コリ 5 : 8

「ですから、私たちは、古いパン種を用いたり、悪意と不正のパン種を用いたりしないで、パン種の入らない、純粋で真実なパンで、祭りをしようではありませんか」

(6) ガラ 5 : 9

「わずかのパン種が、こねた粉の全体を発酵させるのです」

①ここでは、パン種は「偽りの教理」のことである。

4. 「入れる」という動詞

(1) 訳文の比較

「女が、パン種を取って、三サトンの粉の中に入れると、全体がふくらんで来ます」

(新改訳)

「女がこれを取って三サトンの粉に混ぜると、やがて全体が膨れる」(新共同訳)

「女がそれを取って三斗の粉の中に混ぜると、全体がふくらんでくる」(口語訳)

(2) ギリシア語で「エンクルプトウ」。隠す、しのばせるという意味。

英語では、「hide」と訳されている。

(3) このたとえの背景

①ローマの町々にはパン屋があったが、この情景は、ガリラヤ地方の婦人が家で行うパン焼きである。

②1サトンは約14リットル。3サトンは約42リットル。

③ひとりの婦人が捏ねる最大量である。

④これでパンを焼くと、約100人が食べられる。

5. このたとえの意味

(1) 偽りの教えが「奥義としての王国」にこっそりと入り込む。

(2) その結果、キリスト教界全体が影響を受ける。

III. たとえで話す理由 (マタ 13 : 34~35)

1. 34~35 節

「イエスは、これらのことをみな、たとえで群衆に話され、たとえを使わずには何もお話しにならなかった。それは、預言者を通して言われた事が成就するためであった。『わたしはたとえ話をもって口を開き、世の初めから隠されていることどもを物語ろう』」

(1) 群衆から真理を隠すために。

(2) 詩 78 : 2 の成就

「私は、口を開いて、たとえ話を語り、昔からのなぞを物語ろう」

結論：現代への適用

1. 偽りの教えが混ぜられた結果、何が起こったか。
 - (1) キリスト教界が3分割された。
 - ①ローマ・カトリック教会
 - ②東方正教会
 - ③プロテスタント教会

 - (2) 3分割された教会は、それぞれが程度の差こそあれ、偽りの教えを内包している。

2. 歴史的経緯
 - (1) 紀元70年のエルサレムと神殿の崩壊
 - ①エルサレム教会消滅。中心はアンテオケ教会、エペソ教会(80年頃)に移行。
 - ②それでも、紀元1世紀末までは、メシアニックジューが教会を指導した。

 - (2) バル・コクバの反乱(132~135年)以降
 - ①メシアニックジューと他のユダヤ人の間に決定的な分裂が起こる。
 - ②異邦人教会からメシアニックジューとの間に距離を置こうとする動きが出る。
 - ③キリスト教からユダヤ的な要素をすべて除き去ろうとする動きが起こる。
 - *ユダヤ人がユダヤ教の律法を守ることが、否定された。
 - *土曜日安息から、日曜日への移行。
 - *太陰暦から太陽暦への移行(イースターを過越の祭りと別の日にする)

 - (3) ミラノ勅令(313年)以降
 - ①異邦人教会の拡大とメシアニックジュー消滅の時代
 - ②321年には、日曜日を安息日とする法律が作られた。
 - ③392年には、キリスト教が国教化された。
 - ④反ユダヤ主義的な神学体系は、4世紀には出来上がっていた。

 - (4) 1054年の「相互破門」(大シスマ)
 - ①教会の東西分裂
 - ②相互破門は解消されたが、教会「合同」は実現していない。

 - (5) 16世紀の宗教改革
 - ①プロテスタント教会の誕生

- (6) 異邦人教会が、メシアニックジューを排除したところから分裂が始まっている。
- ①それ以降、「あなたたちが間違っており、私たちは正統派である」という論理が使われてきた。
 - ②異邦人教会とメシアニックジューの和解こそ、分裂解消の鍵となる。

「畑に隠された宝のたとえ、高価な真珠のたとえ」

§ 064 マタ 13 : 44~46

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの教えは、たとえ話を中心となった。
- ②9つのたとえ話のテーマは、「奥義としての王国」である。
- ③チャートで「奥義としての王国」の意味を確認する。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ①種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ②種のたとえ
- ③毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④からし種のたとえ
- ⑤パン種のたとえ

これ以降、弟子たちだけに話したたとえ話になる。

- ⑥畑に隠された宝のたとえ
- ⑦高価な真珠のたとえ
- ⑧網のたとえ
- ⑨一家の主人のたとえ

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§ 64)

2. アウトライン

- (1) 畑に隠された宝のたとえ (マタ 13 : 44)
- (2) 高価な真珠のたとえ (マタ 13 : 45~46)

3. 結論 : 現代への適用

畑に隠された宝と高価な真珠のたとえを理解する。

I. 畑に隠された宝のたとえ

「天の御国は、畑に隠された宝のようなものです。人はその宝を見つけると、それを隠して

おいて、大喜びで帰り、持ち物を全部売り払ってその畑を買います」(44節)

1. 間違った解釈

(1) イエスが解釈していないので、種々の解釈が生まれる。

- ①畑に隠された宝とは、福音のことである。
- ②その宝を見つけた人とは、罪人のことである。
- ③その人は、あらゆる犠牲を払って、その畑を買う。

(2) この解釈の問題点

- ①これまでのたとえ話(奥義としての王国)の流れに合っていない。
- ②業による救いを教える結果になる。

2. 「宝」とはイスラエル人のことである。

(1) 出 19 : 5

「今、もしあなたがたが、まことにわたしの声に聞き従い、わたしの契約を守るなら、あなたがたはすべての国々の民の中であって、わたしの宝となる。全世界はわたしのものであるから」

(2) 申 14 : 2

「あなたは、あなたの神、【主】の聖なる民である。【主】は、地の面のすべての国々の民のうちから、あなたを選んでご自分の宝の民とされた」

(3) 詩 135 : 4

「まことに、主はヤコブを選び、ご自分のものとされ、イスラエルを選んで、ご自分の宝とされた」

(4) 「畑に隠された宝」の意味

- ①人目に触れない宝
- ②奥義としての王国の間、イスラエル人は世界に離散した民となる。

3. 持ち物を売り払って畑を買う人は、イエス・キリストである。

(1) イエスの辱めの預言

- ①人間としての誕生
- ②十字架の死

4. このたとえ話が教えていること

「畑に隠された宝のたとえ、高価な真珠のたとえ」

(1) 奥義としての王国の間、イスラエルの民の中から救われる人たちがいる。

①これが、レムナント（イスラエルの残れる者）である。

(2) ロマ11：4～5

「ところが彼に対して何とお答えになりましたか。『バアルにひざをかがめていない男子七千人が、わたしのために残してある』。それと同じように、今も、恵みの選びによって残された者がいます」

①「恵みの選びによって残された者」とは、メシアニックジューのことである。

(3) ガラ6：15～16

「割礼を受けているか受けていないかは、大事なことはありません。大事なのは新しい創造です。どうか、この基準に従って進む人々、すなわち神のイスラエルの上に、平安とあわれみがありますように」(新改訳)

「割礼のあるなしは問題ではなく、ただ、新しく造られることこそ、重要なのである。この法則に従って進む人々の上に、平和とあわれみとがあるように。また、神のイスラエルの上にあるように」(口語訳)

①新改訳、新共同訳は誤訳である。

②「神のイスラエル」とは、メシアニックジューのことである。

③パウロは、異邦人信者と、ユダヤ人信者を祝福している。

II. 高価な真珠のたとえ (45～46節)

「また、天の御国は、良い真珠を捜している商人のようなものです。素晴らしい値うちの真珠の一つ見つけた者は、行って持ち物を全部売り払ってそれを買ってしまいます」(45～46節)

1. 間違った解釈

(1) イエスが解釈していないので、種々の解釈が生まれる。

①高価な真珠とは、福音のことである。

②その真珠を見つけた人とは、罪人のことである。

③その人は、あらゆる犠牲を払って、その真珠を買う。

(2) この解釈の問題点

①これまでのたとえ話（奥義としての王国）の流れに合っていない。

②業による救いを教える結果になる。

2. 高価な真珠とは何か。

(1) 「宝」ほど意味が鮮明ではない。

- ①類推によって意味を見つける必要がある。
- ②宝がユダヤ人のことなら、真珠は異邦人のことではないか。
- ③真珠は海から採れる(ペルシヤ湾が有名)。
- ④海という言葉が象徴的に用いられた場合は、異邦人世界を指す。
- ⑤これらのことから、高価な真珠は異邦人信者のことである。

(2) ダニ 7 : 2~3

「ダニエルは言った。『私が夜、幻を見ていると、突然、天の四方の風が大海をかき立て、四頭の大きな獣が海から上がって来た。その四頭はそれぞれ異なっていた』」

- ①海とは、異邦人世界のことである。
- ②この幻は、異邦人世界から出て来る支配者に関するものである。

(3) 黙 17 : 1

「また、七つの鉢を持つ七人の御使いのひとりが来て、私に話して、こう言った。『ここに来なさい。大水の上ですわっている大淫婦へのさばきを見せましょう。地の王たちは、この女と不品行を行い、地に住む人々も、この女の不品行のぶどう酒に酔ったのです』」

(4) 黙 17 : 15

「御使いはまた私に言った。『あなたが見た水、すなわち淫婦がすわっている所は、もろもろの民族、群衆、国民、国語です』」

3. 商人とは、イエス・キリストである。

(1) この商人は、持ち物を全部売り払った。

結論：現代への適用

1. これまでのたとえ話では、奥義としての王国においては、善と悪がともに存在することが教えられていた。

2. 今回の2つのたとえ話は、奥義としての王国の間に、救いに与るユダヤ人と異邦人がともに起こされることを教えている。

(1) それは、ユダヤ人個人としての救いである。

- ①現在ユダヤ人伝道を行う理由が、そこにある。
- ②民族的救いは、大患難時代の最後、再臨の直前に実現する。
- ③それから、メシア的王国が成就する。
- ④メシア的王国は、メシアが王として地上において王国を統治される状態である。

(2) 異邦人も救われるというのは、弟子たちにとっては新しい情報であった。

①使 15 : 13~14

「ふたりが話し終わると、ヤコブがこう言った。『兄弟たち。私の言うことを聞いてください。神が初めに、どのように異邦人を顧みて、その中から御名をもって呼ばれる民をお召しになったかは、シメオンが説明したとおりです』

- ②エルサレム会議で、異邦人の救いの条件について議論された。
- ③ペテロが自らの体験を話した。
- ④バルナバとパウロが、伝道旅行の成果を分かち合った。
- ⑤イエスの弟のヤコブが裁定を下した。
- ⑥「主の御名をもって呼ばれる民」は、高価な真珠である。

3. 畑を買った人も、高価な真珠を買った人も、ともに最大の犠牲を払った。

(1) これは、イエス・キリストの犠牲を意味している。

- ①イエスは、十字架への道を歩んでおられた。
- ②弟子たちとイエスの認識には、大きな隔りがあった。
- ③イエスは、ユダヤ人の中からも、異邦人の中からも、救いに与る人を起こそうとしておられた。

(2) 2 コリ 8 : 9

「あなたがたは、私たちの主イエス・キリストの恵みを知っています。すなわち、主は富んでおられたのに、あなたがたのために貧しくなられました。それは、あなたがたが、キリストの貧しさによって富む者となるためです」

(3) ピリ 2 : 4~8

「自分のことだけではなく、他の人のことも顧みなさい。あなたがたの間では、そのような心構えでいなさい。それはキリスト・イエスのうちにも見られるものです。キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました」

「網のたとえ、一家の主人のたとえ」

§ 064 マタ 13 : 47~53

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①9つのたとえ話はユニットである。
- ②そのテーマは、「奥義としての王国」である。
- ③チャートで「奥義としての王国」の意味を確認する。

(2) 「奥義としての王国」に関する9つのたとえ話

- ①種蒔く人のたとえ (詳細な解説がある)
- ②種のたとえ
- ③毒麦のたとえ (詳細な解説がある)
- ④からし種のたとえ
- ⑤パン種のたとえ

これ以降、弟子たちだけに話したたとえ話になる。

- ⑥畑に隠された宝のたとえ
- ⑦高価な真珠のたとえ
- ⑧網のたとえ
- ⑨一家の主人のたとえ

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「最初の主要なたとえ話群」 (§ 64)

2. アウトライン

- (1) 網のたとえ (マタ 13 : 47~50)
- (2) 一家の主人のたとえ (マタ 13 : 51~53)

3. 結論 : 9つのたとえ話の復習

網のたとえ話と一家の主人のたとえを理解する。

I. 網のたとえ (マタ 13 : 47~50)

1. 47~48 節

「また、天の御国は、海におろしてあらゆる種類の魚を集める地引き網のようなものです。網がいっぱいになると岸に引き上げ、すわり込んで、良いものは器に入れ、悪いものは捨てるのです」

(1) ガリラヤ湖の漁法

- ①投網
- ②刺し網
- ③地引き網（日本では九十九里浜が有名）

(2) 地引き網

- ①小規模なものは、「片手廻し」と呼ばれる漁法である。
- ②岸にいる人たちが、網を岸に引き上げる。
- ③雑多な魚やゴミなどが交じっている。
- ④すわり込んで、良い魚と悪い魚（もの）を選別する。

2. 49～50 節

「この世の終わりにもそのようになります。御使いたちが来て、正しい者の中から悪い者をえり分け、火の燃える炉に投げ込みます。彼らはそこで泣いて歯ざしりするのです」

(1) 世の終わりに起こる選別

- ①これは、異邦人の裁きのことである。
- ②「海」は、異邦人世界を象徴する言葉である。
- ③選別する主体は、天使たちである。
- ④選別されるのは、異邦人たちである。
- ⑤正しい者（信者）の中から悪い者（偽信者）が選別される。
- ⑥悪い者は、火の燃える炉に投げ込まれる。

3. ヨエ 3 章に出て来る裁き

(1) 1～3 節

「見よ。わたしがユダとエルサレムの繁栄を元どおりにする、その日、その時、わたしはすべての国民を集め、彼らをヨシャパテの谷に連れ下り、その所で、彼らがわたしの民、わたしのゆずりの地イスラエルにしたことで彼らをさばく。彼らはわたしの民を諸国の民の間に散らし、わたしの地を自分たちの間で分け取ったからだ。彼らはわたしの民をくじ引きにし、子どもを遊女のために与え、酒のために少女を売って飲んだ」

4. マタ 25 章に出て来る裁き

- (1) 10人の乙女のたとえ (1～13節) イスラエルの裁き
- (2) タラントのたとえ (14～30節) イスラエルの裁き
- (3) 羊と山羊のたとえ (31～46節)

- ①これは、異邦人の裁きのたとえである。
- ②「国々の民」とは、大患難時代をくぐり抜けた異邦人である。
- ③彼らは、民族としてではなく、個人的に裁かれる。
- ④千年王国が始まる前に行われる異邦人の裁きである。
- ⑤彼らは、羊と山羊が交じった集団である。

*大患難時代にユダヤ人をどのように扱ったかによって羊か山羊かが決まる。

*羊の異邦人は、信仰のある異邦人である。親ユダヤ。

*山羊の異邦人は、信仰のない異邦人である。反ユダヤか無関心派。

- ⑥羊の異邦人は、王によって千年王国に招かれる。
- ⑦山羊の異邦人は、永遠の刑罰に入る。

II. 一家の主人のたとえ (マタ 13 : 51～53)

1. 51節

「あなたがたは、これらのことがみなわかりましたか。」彼らは「はい」とイエスに言った」

- (1) 弟子たちは、「はい」と答えた。
 - ①彼らの答えは、驚くべきものである。
 - ②これ以降の彼らの質問や態度を見ていると、到底理解したとは思えない。

2. 52～53節

「そこで、イエスは言われた。『だから、天の御国の弟子となった学者はみな、自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人のようなものです。』これらのたとえを話し終わると、イエスはそこを去られた」

(1) 訳文の比較

「天の御国の弟子となった学者」(新改訳)

「天の国のことを学んだ学者」(新共同訳)

「天国のことを学んだ学者」(口語訳)

「天の御国について教えを受けた律法学者」(直訳)

- ①グラマテユースとは、英語で scribe である。
- ②ここでイエスは、ユダヤ的文脈で語っている。
- ③イエスの弟子たちは、奥義としての王国について学んだ律法学者である。

(2) 「自分の倉から新しい物でも古い物でも取り出す一家の主人」

- ①弟子たちは、今や自由に資産を運用する一家の主人のようになった。
- ②ここでのイメージは金庫である可能性がある。
 - *この主人は、金庫に新しいコインと古いコインを入れている。
 - *必要に応じて、それらのコインを用いる。
- ③あるいは、倉に新しい宝と古い宝を持っていると考えてもいい。
 - *それを、自由自在に取り出し、利用する。
- ④この主人が新しい宝と古い宝を所有しているという点が、ポイントである。
 - *古い宝とは、旧約聖書の知識である。
 - ・あるいは、他の4つの神の国に関する知識と言ってもよい。
 - *新しい宝とは、新約聖書の知識である。
 - ・あるいは、奥義としての王国に関する知識と言ってもよい。

3. 旧新の知識の対比

(1) メシア的王国について

- ①メシアが支配する王国が出現することは知っていた。
- ②しかし、それが提供された時、ユダヤ人がそれを拒否することは知らなかった。

(2) 御国の性質について

- ①メシア的王国では、義と善が支配することを知っていた。
- ②しかし、奥義としての王国では、義と悪が並存することは知らなかった。

(3) 新しい知識の内容

- ①奥義としての王国の出現（メシアの拒否から再臨までの期間）
- ②小さな始まりが大きな結果を生む。
- ③イエスを主と告白する人の中に、本物と偽物が交じっている。
- ④この期間、神はイスラエルとの関係を維持しつつ、教会を創造する。
- ⑤この期間の終わりに、異邦人の裁きが行われる。
 - *羊の異邦人は千年王国に入り、キリストとともに千年間支配する。

4. 9つのたとえ話を学んだ私たちは、一家の主人である。

- (1) 私たちには、新旧の知識を取り出し、福音を宣べ伝える使命と責任がある。
- (2) 私たちには、他の人たちを訓練して、キリストの弟子とする使命と責任がある。

結論：9つのたとえ話の復習

*奥義としての王国とは、キリスト教界(真の信者と偽の信者がともに含まれる)のことである。

1. 種蒔く人のたとえ

「継続して福音の種が蒔かれ続けるが、多くの人がそれを拒否する」

2. 種のたとえ

「福音の種には、自ら芽を出す内적인のちが宿っている」

3. 毒麦のたとえ

「本物の信仰を持った信者と、偽物の信仰を持った信者とが、混在する」

4. からし種のたとえ

「奥義としての王国は、小さな始まりから巨大な規模にまで成長する」

5. パン種のたとえ

「奥義としての王国は、その内に偽りの教理を内包している」

6. 畑に隠された宝のたとえ

「主は、イスラエルの残れる者をご自分のものとされる」

7. 高価な真珠のたとえ

「主は、異邦人の中からもご自分のものを獲得される」

8. 網のたとえ

「奥義としての王国は、異邦人の裁きをもって終わる」

9. 一家の主人のたとえ

「奥義としての王国は、他の4つの王国に似ている点もあるが、異なっている点も多い」

総まとめ

*イスラエルのメシア拒否して以降、メシア的王国はどうなったのかという疑問への回答。

*メシア的王国は、メシアの再臨の時に成就する。

*それまでの間は、善と悪がともに存在する。

「嵐を静めるイエス」

§ 065 マコ 4 : 35～41

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①ユダヤ人たちは、イエスを拒否した。
- ②つまり、イエスが提供するメシア的王国を拒否したのである。
- ③それ以来、奥義としての王国の時代に入った。
- ④イエスの教え方が変化した。イエスはたとえ話だけで教えるようになった。
- ⑤イエスの奇跡は、弟子訓練を目的としたものとなった。
- ⑥この箇所(の)の奇跡は、弟子訓練という文脈の中で読まねばならない。
- ⑦イエスの行い(奇跡)が、イエスのことば(教え)の真実性を証明する。

(2) 連続して起こる奇跡

- ①自然界の支配
- ②悪霊の追い出し
- ③不治の病の癒し
- ④死者の蘇生

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「湖を渡る際に、イエスは嵐を静める」 (§ 65)

マコ 4 : 35～41、マタ 8 : 18、23～27、ルカ 8 : 22～25

2. アウトライン

- (1) イエスの一日 (35 節)
- (2) 弟子たちを訓練する出来事 (36～37 節)
- (3) 弟子たちの反応 (38 節)
- (4) イエスの対応 (39～40 節)
- (5) 弟子たちの驚き (41 節)

3. 結論 :

- (1) イエスの 2 面性
- (2) 人生の嵐に会った時

嵐を静める奇跡の意味を理解する。

I. イエスの一日 (35 節)

1. 生き生きとした描写

(1) 目撃者の情報であろう。

①マルコは、ペテロから直接この話しを聞いたのであろう。

2. 35 節

「さて、その日のこと、夕方になって、イエスは弟子たちに、『さあ、向こう岸へ渡ろう』
と言われた」

(1) 「その日のこと、夕方になって」とある。

①同じ日が続いている。実に長い日である。

(例話) 聖地旅行の1日

(2) その日に何が起こったかを復習する。

①イスラエルの指導者たちがイエスを拒否したとき、イスラエルの民は赦されない罪を犯した。

②パリサイ人たちは「しるし」を要求したが、裁きの宣言を受けた。

③イエスは奥義としての王国について教え始めた。それが9つのたとえ話である。

④その教えの最中に、イエスの家族がイエスを連れ戻そうとしてやって来た。

⑤この一日で、イスラエルの2000年に及ぶ運命が決まった。

(3) これでイエスの肉体が疲れないはずがない。

①イエスが舟の中で眠ったのは、よく理解できる。

(4) イエスから弟子たちに、「さあ、向こう岸へ渡ろう」と提案された。

①事前の準備はない。

②恐らく、休息の場、静思の時を、必要とされたのであろう。

II. 弟子たちを訓練する出来事 (36～37 節)

1. 36 節

「そこで弟子たちは、群衆をあとに残し、舟に乗っておられるままで、イエスをお連れした。他の舟もイエスについて行った」

(1) 舟を操ったのは、弟子たちであった。

「嵐を静めるイエス」

①彼らの多くが、経験豊かな漁師たちであった。

(2) 他の舟(複数形)

①イエスの教えを、湖上で小舟に乗って聴いていた人たちがいたということ。

②彼らは、イエスのそばにいたいので、イエスの舟について行った。

③次に起こる嵐は、弟子たちだけでなく、それらの小舟に乗っていた人たちも経験した。

④イエスは、弟子たちだけでなく、それらの人たちも救ったのである。

2. 37節

「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった」

(1) ガリラヤ湖の地形のゆえに、このような激しい突風が起こる。

①ガリラヤ湖は、すり鉢型になっている。

②ガリラヤ湖の上は、風の通り道になっている。

(2) 並行箇所と比較

「すると、激しい突風が起こり、舟は波をかぶって、水でいっぱいになった」(マコ)

「すると、見よ、湖に大暴風が起こって、舟は大波をかぶった」(マタ)

「ところが突風が湖に吹きおろして来たので、弟子たちは水をかぶって危険になった」

(ルカ)

(3) これは、非常に危険な状態である。

①通常漁師たちは、突然の嵐に備えるために、カペナウム近辺で漁をしていた。

②この場面のように、沖合で嵐に会うと、大変危険である。

③夕刻の突風の場合、さらに危険である。

III. 弟子たちの反応(38節)

1. 38節 a

「ところがイエスだけは、ともなうで、枕をして眠っておられた」

(1) 嵐の舟の中で眠るイエス

①肉体的に疲れ切っていた。メッセージを語ると、エネルギーを消耗する。

②向こう岸に着くまでの短い時間、休息しようと思われた。

③これは、イエスの人間性を示している。

「嵐を静めるイエス」

(2) 眠っている場所

- ①「とものほう」は、船の最後尾で、唯一水が溜まらない場所である。
- ②「枕」は、座るための低いベンチであり、頭を載せることもできた。

2. 38節b

「弟子たちはイエスを起こして言った。『先生。私たちがおぼれて死にそうでも、何とも思われませんか』」

(1) この言葉は、イエスへの信頼を欠いた言葉である。

- ①イエスの介入を待ちきれない弟子たちがそこにいる。

(2) この言葉を言ったのは、誰か。

- ①弟子たちが言った。
- ②恐らくスポークスマンは、ペテロであろう。
- ③「何とも思われませんか」という言葉は、マルコの福音書だけに出て来る。
- ④恐らくペテロは、忘れていなかったなのであろう。それをマルコに伝えた。

3. ヨナ1:5~6との対比

「水夫たちは恐れ、彼らはそれぞれ、自分の神に向かって叫び、船を軽くしようと船の積荷を海に投げ捨てた。しかし、ヨナは船底に降りて行って横になり、ぐっすり寝込んでいた。船長が近づいて来て彼に言った。『いったいどうしたことか。寝込んだりして。起きて、あなたの神にお願いしなさい。あるいは、神が私たちに心を留めてくださって、私たちは滅びないですむかもしれない』」

IV. イエスの対応 (39~40節)

1. 39節

「イエスは起き上がって、風をしっかりとつけ、湖に『黙れ、静まれ』と言われた。すると風はやみ、大なぎになった」

(1) 「静まれ」という動詞

- ①ギリシア語で「フィモオウ」。
- ②英語で「muzzle」。
- ③意味は、口輪をはめる、口を封じる。
- ④マコ1:25では、悪霊の追い出しに使われている動詞である。

「イエスは彼をしかって、『黙れ。この人から出て行け』と言われた」

- ⑤ある学者は、この嵐の背後に悪霊の働きがあるとも考えられるという。

(2) 「すると風はやみ、大なぎになった」

- ①ことばで天地を創造された方が、ことばで被造世界を支配される。
- ②この変化は、急激なものであった。

2. 40節

「イエスは彼らに言われた。『どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです』」

(1) 「どうしてそんなにこわがるのです」

- ①ギリシア語で「デイロス」。
- ②英語で「fearful」。
- ③日本語では、恐怖を感じることを。

(2) 訳文の比較

「どうしてそんなにこわがるのです。信仰がないのは、どうしたことです」(新改訳)

「なぜ怖がるのか。まだ信じないのか」(新共同訳)

「なぜ、そんなにこわがるのか。どうして信仰がないのか」(口語訳)

(3) イエスは弟子たちの信仰が成長していないことを嘆かれた。

①マコ4:11

「あなたがたには、神の国の奥義が知らされているが、ほかの人たちには、すべてがたとえで言われるのです」

②マコ4:34

「たとえによらないで話されることはなかった。ただ、ご自分の弟子たちにだけは、すべてのことを解き明かされた」

③神の権威と力はイエスの内に宿るのであるが、それを認めることは難しい。

V. 弟子たちの驚き (41節)

1. 41節

「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう』」

(1) 「大きな恐怖に包まれて」

- ①ギリシア語では「フォベオウ」。
- ②英語では「awe」。

「嵐を静めるイエス」

- ③日本語では、畏怖の念を抱く。恐怖と畏怖とは、別である。
- (2) 弟子たちが持っていた古い宝（旧約聖書の知識）
 - ①詩 89 : 8~9
「万軍の神、【主】。だれが、あなたのように力がありましょう。主よ。あなたの真実はあなたを取り囲んでいます。あなたは海の高まりを治めておられます。その波がさかまくとき、あなたはそれを静められます」
 - ②詩 107 : 29
「主があらしを静めると、波はないだ」
 - ③弟子たちにとっては、神だけが嵐を静めることができる。
- (3) 新しい宝は、まだ身に付いていなかった（奥義としての王国の知識）。
 - ①目の前にいるイエスというお方は、だれなのか。
 - ②信仰の成長が見られる。

結論

1. イエスの2面性

- (1) 人としては、疲れて眠っておられら。
- (2) 神としては、眠ることなく弟子たちを見守っておられた。
「見よ。イスラエルを守る方は、まどろむこともなく、眠ることもない」(詩 121 : 4)

2. 人生の嵐に会った時

- (1) 嵐は、私たちが人生で会う苦難の象徴である。
- (2) 弟子たちの訓練
 - ①イエスは弟子たちを守られた。
 - ②弟子たちは、奥義としての王国でどのように行動すべきかを学んだ。
 - ③パリサイ人たちのように、イエスの力を悪霊に帰すことをしてはならない。
- (3) 私たちの訓練
 - ①イエスは私たちが理解してくださる（人間としてのイエス）。
 - ②イエスは私たちが守ってくださる（神としてのイエス）。
 - ③今の時は、奥義としての王国である。
 - * 肉体の死に遭遇したとしても、霊的には最後まで守ってくださる。

「悪霊につかれたゲラサ人の癒し」

§ 066 マコ 5 : 1~20

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの奇跡は、弟子訓練を目的としたものとなった。
- ②この箇所(マコ5:1-20)の奇跡も、弟子訓練という文脈の中で読まねばならない。
- ③イエスの行い(奇跡)が、イエスのことば(教え)の真実性を証明する。

(2) 連続して起こる奇跡

- ①自然界の支配
- ②悪霊の追い出し
- ③不治の病の癒し
- ④死者の蘇生

(3) 聖地旅行の体験

- ①タブハからエン・ゲブへ。
- ②その途中のクルシという場所の地形は、福音書に記された通りのものである。

(4) A. T. ロバートソンの調和表

「湖の向こう岸でイエスは悪霊につかれたゲラサ人を癒す」 (§ 66)

マコ 5 : 1~20、マタ 8 : 28~34、ルカ 8 : 26~39

2. アウトライン

- (1) 奇跡が起こった場所 (1 節)
- (2) 悪霊につかれた人の悲惨な状態 (2~5 節)
- (3) 悪霊の追い出し (6~13 節)
- (4) 住民たちの反応 (14~17 節)
- (5) 解放された人の反応 (18~20 節)

3. 結論 : 弟子訓練の内容

悪霊につかれたゲラサ人の癒しから教訓を学ぶ

I. 奇跡が起こった場所 (1 節)

1. 1 節

「こうして彼らは湖の向こう岸、ゲラサ人の地に着いた」

(1) 地名について

- ①マルコとルカには、「ゲラサ人の地」とある。
- ②マタイには、「ガダラ人の地」とある。
- ③矛盾ではなく、①は町の名前、②は地域の名前である。

(2) ガリラヤの東岸は、異邦人の地である。

- ①イエスは、弟子訓練のためにユダヤ人の地を離れて異邦人の地に行かれた。
- ②デカポリス(10の町)は、1つの例外を除いてすべて東岸にあった。
- ③例外は、スキトポリス(ベテ・シャン)であった。

II. 悪霊につかれた人の悲惨な状態(2~5節)

1. 2 節

「イエスが舟から上がられると、すぐに、汚れた霊につかれた人が墓場から出て来て、イエスを迎えた」

(1) 「すぐに」という言葉は、マルコの福音書の特徴でもある。

(2) 悪霊につかれた人の人数

- ①マタイでは、「ふたり」である。
- ②マルコとルカでは、「ひとり」である。
- ③マルコとルカは、より深刻な状態の人に焦点を合わせている。

(例話) フロイスの『日本史』 悪霊の例多出。

2. 3~5 節

「この人は墓場に住みついており、もはやだれも、鎖をもってしても、彼をつないでおくことができなかった。彼はたびたび足かせや鎖でつながれたが、鎖を引きちぎり、足かせも砕いてしまったからで、だれにも彼を押さえるだけの力がなかったのである。それで彼は、夜昼となく、墓場や山で叫び続け、石で自分のからだを傷つけていた」

(1) 墓場が住居

- ①人びとは、岩に出来た横穴を墓場としていた(人工的に掘ることもあった)。
- ②穴の奥には遺体を葬る個別の部屋があり、そこは閉じられていた。
- ③しかし、穴そのものには扉がないので、自由に出入りすることができた。
- ④墓場は、町から離れた場所に位置していた。
- ⑤つまりこの人は、共同体から隔離された場所で生きていたということである。

(2) 悲惨な状態

①超自然の力が彼を暴れさせていた。

*鎖や足かせを使っても、彼を静めることはできなかった。

②内面の平安が奪われていた。

*夜昼となく、墓場や山で叫び続けていた。

③石で自分の体を傷つけていた。

*悪魔礼拝の一形態であろう。

III. 悪霊の追い出し (6～13 節)

1. 6～7 節

「彼はイエスを遠くから見つけ、駆け寄って来てイエスを拝し、大声で叫んで言った。『いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか。神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください』」

(1) これ以降、この人と悪霊の「ゆらぎ現象」が見られる。

①「駆け寄って来てイエスを拝し、」

*礼拝ではなく、単に敬意を表する態度を取っているだけ。

②「大声で叫んで言った。」

*態度の急変が見られる。

(2) 「いと高き神の子、イエスさま。いったい私に何をしようというのですか」

①弟子たちよりも、悪霊の方がイエスを認識している。

②イエスの名を呼ぶのは、自らの支配を確立するためである。

③マコ 1 : 24

「ナザレの人イエス。いったい私たちに何をしようというのです。あなたは私たちを滅ぼしに来たのでしょうか。私はあなたがどなたか知っています。神の聖者です」

(3) 「いと高き神」

①旧約聖書では、異邦人がよく使う御名。偶像に勝るイスラエルの神。

②ダニ 3 : 26

「それから、ネブカデネザルは火の燃える炉の口に近づいて言った。『シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴ。いと高き神のしもべたち。すぐ出て来なさい。』そこで、シャデラク、メシャク、アベデ・ネゴは火の中から出て来た」

(4) 「神の御名によってお願いします。どうか私を苦しめないでください」

- ①悪霊は、自分の運命が終わりに近づいていることを感じた。
- ②「神の御名によって」というのは、悪霊を追い出す際の祈りの言葉である。
- ③悪霊は、その言葉を悪用している。

2. 8節

「それは、イエスが、『汚れた霊よ。この人から出て行け』と言われたからである」

(1) この聖句は、イエスと悪霊の対話の中に挟まれた挿入句である。

- ①悪霊がうろたえている理由を説明している。

3. 9節

「それで、『おまえの名は何か』とお尋ねになると、『私の名はレギオンです。私たちは大ぜいですから』と言った」

(1) イエスは、伝統的なユダヤ的悪霊追い出し法を採用している。

(2) 「私の名はレギオンです。私たちは大ぜいですから」

- ①レギオンとは、ローマ軍において、3,000~6,000人の兵士を持つ軍団の名称。
- ②この言葉は、力と圧制の象徴でもある。
- ③つまり、この人の内に最低3,000の悪霊が住みついていたということ。
- ④主語が、「私」から「私たちに」に変化している。
- ⑤「私」とは、悪霊の群れの中心的存在であろう。

4. 10節

「そして、自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願した」

(1) ルカ 8 : 31

「悪霊どもはイエスに、底知れぬ所に行け、とはお命じになりませんようにと願った」

- ①ギリシア語では、「アブソス」である。
- ②悪霊どもが行く場所
- ③最後の運命を迎える前に、しばらくの猶予をくださいという意味。

(2) マコ 5 : 10

「自分たちをこの地方から追い出さないでくださいと懇願した」

- ①辺鄙な場所に追いやられると、取りつく人がいなくなる。

5. 11～12節

「ところで、その山腹に、豚の大群が飼ってあった。彼らはイエスに願って言った。『私
たちを豚の中に送って、彼らに乗り移らせてください』」

(1) ずっと離れた所(山腹)に豚の大群が飼ってあった(マタ8:30)。

- ①この地は、異邦人の地である。
- ②デカポリスで食用の肉として販売するために、飼育していたのであろう。

(2) 悪霊どもは、豚の中に乗り移ることを願った。

- ①豚を殺し、豚の所有者がイエスに反感を抱くように仕向けたという人もいる。
- ②人間がだめなら、豚でもよい、ということだろう。
- ③その場合でも、キリストの許可がある。

6. 13節

「イエスがそれを許されたので、汚れた霊どもは出て行って、豚に乗り移った。すると、
二千匹ほどの豚の群れが、険しいがけを駆け降り、湖へなだれ落ちて、湖におぼれてしま
った」

(1) 豚は、悪霊どもを内に宿すことに耐えられなかった。

- ①2千匹ほどの豚の群れが死んだ。
- ②この地の地形をよく表現している。

(2) イエスが所有者の権利を妨害したと批判する人がいる。

- ①神が悪魔を取り扱う方法は、人間には理解不可能である。
- ②エデンの園、ヨブの体験
- ③イエスには何らかの目的があったはずである。
 - *偶像に捧げるための豚だったか。
 - *物質のむなしさを教えるためだったか。

IV. 住民たちの反応(14～17節)

1. 14～15節

「豚を飼っていた者たちは逃げ出して、町や村々でこの事を告げ知らせた。人々は何事が
起こったのかと見にやっけて来た。そして、イエスのところに来て、悪霊につかれていた人、
すなわちレギオンを宿していた人が、着物を着て、正気に返ってすわっているのを見て、
恐ろしくなった」

(1) 町とはゲラサの町、村々とはガダラ地方の村々。

「嵐を静めるイエス」

- ①豚飼いの牧童たちは、このことを所有者に知らせた。
- ②自分たちの過ちではなく、不可抗力であったと説明するため。
- ③所有者(野次馬もいた)たちは、自分の目で確かめるためにやって来た。

(2) 彼らが見たもの

- ①湖に浮かぶ無数の豚の死骸
- ②正気に返った人

*着物を着ていた。

*正気に返って座っていた。

(3) 「恐ろしくなった」

①ギリシア語で「フォベオウ」。畏怖の念。

②マコ4:41

「彼らは大きな恐怖に包まれて、互いに言った。『風や湖までが言うことをきくとは、いったいこの方はどういう方なのだろう』」

③湖が凪いだとき、弟子たちを恐れた。心が平安で満たされた時、異邦人たちは驚いた。

2. 16～17 節

「見ていた人たちが、悪霊につかれていた人に起こったことや、豚のことを、つぶさに彼らに話して聞かせた。すると、彼らはイエスに、この地方から離れてくださるよう願った」

(1) 「見ていた人たち」とは、牧童たちと弟子たち。

- ①彼らは、目撃した内容を詳細に所有者たちに話して聞かせた。
- ②豚にまで言及しているのは、マルコだけである。
- ③経済的損失に光を当てるためである。

(2) 「すると、彼らはイエスに、この地方から離れてくださるよう願った」

- ①イエスがそばにいと、もっと大きな損失を被る可能性がある。
- ②ユダヤ人であるイエスが、異邦人である自分たちを裁くかもしれない。
- ③イエスが同じ場所に戻ったという記録はない。

V. 解放された人の反応 (18～20 節)

1. 18～19 節

「それでイエスが舟に乗ろうとされると、悪霊につかれていた人が、お供をしたいとイエスに願った。しかし、お許しにならないで、彼にこう言われた。『あなたの家、あなたの

家族のところに帰り、主があなたに、どんなに大きなことをしてくださったか、どんなにあわれんでくださったかを、知らせなさい』

(1) 「お供をしたい」とは、弟子になりたいという意味である。

①彼は初めて、自分の人生をかけてもいいと思えるものを発見した。

(2) イエスはそれを断った。

①この段階では、イエスは異邦人の弟子を受け入れてはいなかった。

(3) この人は、自分の家に帰って証しをするように命じられた。

①ユダヤ人たちには、沈黙が命じられた。

②異邦人である彼には、宣べ伝えるようにと命じられた。

2. 20 節

「そこで、彼は立ち去り、イエスが自分にどんなに大きなことをしてくださったかを、デカポリスの地方で言い広め始めた。人々はみな驚いた」

(1) 彼の奉仕が有効であったことは、4000人のパンの奇跡の箇所でも明らかになる。

①マコ8:1~10は、デカポリス地方の異邦人に対する奇跡である。

結論：弟子訓練の内容

1. 悪霊を支配するイエスの力

(1) ベルゼブル論争で、パリサイ人たちは、イエスが悪霊の頭の力を利用していると言った。

(2) 悪霊につかれたゲラサ人の癒しは、イエスが悪霊に対して権威を持っていることを示した。

2. 人間の命の価値

(1) 豚の所有者たちの視点は、癒された人ではなく、失った豚にある。

(2) イエスの視点は、人の命は2000匹の豚よりも尊いという点にある。

3. 異邦人伝道の重要性

(1) ユダヤ人たちは、イエスを拒否した。

(2) 異邦人の時代が来ようとしている。

(3) 異邦人による異邦人伝道

「長血の女とヤイロの娘(1)」

§067 マコ5:21~34

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの奇跡は、弟子訓練を目的としたものとなった。
- ②この箇所(箇所)の奇跡も、弟子訓練という文脈の中で読まねばならない。
- ③イエスの行い(奇跡)が、イエスのことば(教え)の真実性を証明する。

(2) 連続して起こる奇跡

- ①自然界の支配
- ②悪霊の追い出し
- ③不治の病の癒し
- ④死者の蘇生

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「ヤイロの娘と、イエスの着物を触った女の癒し」 (§67)

マコ5:21~43、マタ9:18~26、ルカ8:40~56

(4) サンドイッチ構造

- ①ヤイロの懇願 → 長血の女の癒し → ヤイロの娘の蘇生
- ②今回は、長血の女の癒しを取り上げる。

2. アウトライン

- (1) 会堂管理者ヤイロ (21~24 節)
- (2) 長血の女 (25~34 節)

3. 結論:

- (1) 弟子訓練の内容
- (2) 中断(妨害)への対処

イエスの弟子訓練から学ぶ。

I. 会堂管理者ヤイロ (21~24 節)

1. 21 節

「イエスが舟でまた向こう岸へ渡られると、大ぜいの人の群れがみもとに集まった。イエスは岸べにとどまっておられた」

(1) イエスは、ユダヤ人地区に戻られた。

- ①恐らくカペナウム近辺であろう。
- ②いつものように、大ぜいの人が集まって来た。

2. 22～23 節

「すると、会堂管理者のひとりでヤイロという者が来て、イエスを見て、その足もとにひれ伏し、いっしょうけんめい願ってこう言った。『私の小さい娘が死にかけています。どうか、おいでくださって、娘の上に御手を置いてやってください。娘が直って、助かるようにしてください』」

(1) ヤイロという名の会堂管理者

- ①建物の管理、礼拝の秩序の維持
- ②巻物を渡す「係りの者」とは別である(ルカ4:20)。
- ③その共同体の長老のひとりである。
- ④カペナウムには会堂の遺跡があるが、その会堂の管理者かどうかは分からない。
- ⑤会堂管理者全員がイエスに敵対していたわけではない。

(2) ヤイロの信仰

- ①彼は、イエスの足元にひれ伏した。
- ②彼は、イエスに対する信仰を持った。
- ③イエスは、新しい方針を採用しておられた。
- ④イエスに対する信仰を持った者だけを癒される。

(3) ヤイロの娘

- ①瀕死の状態であった。
- ②「12歳ぐらいのひとり娘」(ルカ8:42)
- ③「娘の上に御手を置いてやってください」

*当時の癒しの方法

*癒し手から力が流れ出すという認識があった。

④マコ6:4～5

「イエスは彼らに言われた。『預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです。』それで、そこでは何一つ力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった」

3. 24節

「そこで、イエスは彼といっしょに出かけられたが、多くの群衆がイエスについて来て、イエスに押し迫った」

(1) イエスは、群衆に取り囲まれて、身動きの取れない状態になった。

II. 長血の女(25～34節)

1. 25～26節

「ところで、十二年の間長血をわずらっている女がいた。この女は多くの医者からひどいめに会わされて、自分の持ち物をみな使い果たしてしまっただが、何のかいもなく、かえって悪くなる一方であった」

(1) モーセの律法が教える儀式的汚れ

①レビ 15 : 25～27

「もし女に、月のさわりの間ではないのに、長い日数にわたって血の漏出がある場合、あるいは月のさわりの間が過ぎても漏出がある場合、その汚れた漏出の間中、彼女は、月のさわりの間と同じく汚れる。彼女がその漏出の間中に寝る床はすべて、月のさわりのときの床のようになる。その女のすわるすべての物は、その月のさわりを間の汚れのように汚れる。これらの物にさわる者はだれでも汚れる。その者は衣服を洗い、水を浴びる。その者は夕方まで汚れる」

②民 19 : 11

「どのような人の死体にでも触れる者は、七日間、汚れる」

(2) 12年の間、長血をわずらっている女

①肉体的苦痛

- * 当時は平均年齢が40歳前後
- * 思春期からこの病に苦しみ出したと思われる。
- * 彼女の、成人女性としての生活の半分を苦しみの中で過ごした。

②社会的・靈的苦痛

- * イスラエル共同体の行事や礼拝に参加できない。
- * 未婚か、離婚した女性であろう。
- * 孤独な人生
- * ラビたちは、汚れに触れることを恐れて、女性そのものに触れなかった。

(3) 医者からひどいめに会された。

- ①ルカには、この表現はない。
- ②財産を使い果たしたが、病気の癒しはなかった。

2. 27～29節

「彼女は、イエスのことを耳にして、群衆の中に紛れ込み、うしろから、イエスの着物にさわった。『お着物にさわることでもできれば、きっと直る』と考えていたからである。すると、すぐに、血の源がかれて、ひどい痛みが直ったことを、からだに感じた」

(1) 彼女にはイエスに対する信仰があった。

- ①イエスの噂を聞いていた。
- ②群衆の中に紛れ込んだ。
*本来はあり得ない行動である。

(2) 「イエスの着物にさわった」

- ①彼女がさわったのは、着物のふさである。
- ②申 22:12
「身にまとう着物の四隅に、ふさを作らなければならない」
- ③ルカ 8:44a
「イエスのうしろに近寄って、イエスの着物のふさにさわった。すると、たちどころに出血が止まった」
- ④彼女は密かに癒しを受け取ろうとした。

(3) 彼女は、ただちに癒しが起こったことを自覚した。

- ①イエスは何も行動を起こしていない。
- ②彼女の信仰と、弟子たちの信仰の対比

3. 30～31節

「イエスも、すぐに、自分のうちから力が外に出て行ったことに気づいて、群衆の中を振り向いて、『だれがわたしの着物にさわったのですか』と言われた。そこで弟子たちはイエスに言った。『群衆があなたに押し迫っているのをご覧になっていて、それでも「だれがわたしにさわったのか」とおっしゃるのですか』」

(1) イエスの認識

- ①イエスが自覚しないままで、力が外に出て行くことはない。
- ②イエスは、だれが着物にさわったかを知っておられた。
- ③物理的に触れることと、信仰によって触れることとは、大いに異なる。
*そこには、力の流れと、癒しがある。

「長血の女とヤイロの娘(1)」

- ④イエスは、この女に信仰について教えようとされた。
- ⑤また、公の信仰告白を引き出し、彼女を正常な生活に戻そうとされた。

(2) 弟子たちの認識

- ①誰もかれもがイエスに押し迫っているのに、その質問はおかしいと考えた。
- ②彼らには、何が起こったかを知る力がなかった。

4. 32～34 節

「イエスは、それをした人を知ろうとして、見回しておられた。女は恐れおののき、自分の身に起こった事を知り、イエスの前に出てひれ伏し、イエスに真実を余すところなく打ち明けた。そこで、イエスは彼女にこう言われた。『娘よ。あなたの信仰があなたを直したのです。安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい』

- (1) 女は、公に証しをした。
 - ①彼女は密かに去ろうとしていたが、これによって平安を得た。
- (2) イエスは彼女の神学を正された。
 - ①「あなたの信仰があなたを直したのです」
 - ②「安心して帰りなさい。病気にかからず、すこやかでいなさい」
 - ③イエスの優しさが溢れている言葉である。

5. 35 節

「イエスが、まだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人がやって来て言った。『あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましょう』

- (1) 娘は亡くなった。
 - ①もう死んだのだから、イエスに来てもらう必要はなくなった。
 - ②さあ、イエスはどうするのか。
 - ③ヤイロは、どうするのか。

結論：

1. 弟子訓練の内容

- (1) 長血の女が受けた信仰の訓練
 - ①迷信的信仰、儀式的信仰から、イエスに信頼する信仰への移行
- (2) ヤイロが受けた信仰の訓練

- ①イエスには、不治の病をいやす力があるという信仰
- ②さらに、死者を甦らせる力があるという信仰への飛躍

(3) 弟子たちが受けた信仰の訓練

- ①イエスの権威の再発見
- ②弟子集団外の者たちが発揮する信仰からの教訓

2. 中断(妨害)への対処

(1) ヤイロの視点から見ると、長血の女は「妨害」である。

- ①早くイエスに自分の家に来てほしい。
- ②娘のことを考えると、一刻の猶予もならない。
- ③彼は、娘が死んだという知らせを受け取った。

(2) イエスの視点から見ると、「妨害」は祝福である。

- ①長血の女の癒しは、ヤイロの信仰に励ましを与えた。
- ②娘が死んだので、イエスの力がより鮮明に表れることになる。

(3) 私たちの人生における計画の中断

(例話) 土曜日にカウンセリングを求めてきた女性信者

- ①自分の計画を妨害することが起こったなら、それを神の使いと考えよ。
- ②それは、私たちの自己中心性を粉砕する。
- ③自分の計画ではなく、神の御心だけが成るという信仰へ私たちを導く。
- ④計画が中断された時、私たちは、神に捧げる時間を与えられたのである。

(例話) マケドニヤの幻

「長血の女とヤイロの娘(2)」

§067 マコ5:35~43

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの奇跡は、弟子訓練を目的としたものとなった。
- ②この箇所(マコ5:35~43)の奇跡も、弟子訓練という文脈の中で読まねばならない。

(2) 連続して起こる奇跡

- ①自然界の支配
- ②悪霊の追い出し
- ③不治の病の癒し
- ④死者の蘇生

(3) A. T. ロバートソンの調和表

「ヤイロの娘と、イエスの着物を触った女の癒し」 (§67)

マコ5:21~43、マタ9:18~26、ルカ8:40~56

(4) サンドイッチ構造

- ①ヤイロの懇願 → 長血の女の癒し → ヤイロの娘の蘇生
- ②長血の女の登場は、ヤイロにとっては妨害(中断)であった。
- ③しかし、その妨害に意味がある。

2. アウトライン

- (1) 落胆したヤイロへのことば (35~36節)
- (2) 泣き叫ぶ人々へのことば (37~40節)
- (3) 死んだ少女へのことば (41~43節)

3. 結論:

- (1) イエスの弟子訓練の総まとめ
- (2) 3人の弟子たちの訓練

ヤイロの娘の蘇生から学ぶ。

I. 落胆したヤイロへのことば (35~37節)

1. 35節

「イエスが、まだ話しておられるときに、会堂管理者の家から人がやって来て言った。『あなたのお嬢さんはなくなりました。なぜ、このうえ先生を煩わすことがありましょう』」

(1) 娘は亡くなった。

- ① 気温の高いパレスチナでは、葬儀の準備はただちに行われた。
- ② 親に情報を伝える前に、すでに泣き女たちを集める作業を始めていた。
- ③ もう死んだのだから、イエスに来てもらう必要はなくなった。

(2) 会堂管理者ヤイロの心配が現実のものとなった。

2. 36節

「イエスは、その話のことばをそばで聞いて、会堂管理者に言われた。『恐れなくて、ただ信じていなさい』」

(1) 訳文の比較

「イエスは、その話のことばをそばで聞いて」(新改訳)

「イエスはその話をそばで聞いて」(新共同訳)

「イエスはその話している言葉を聞き流して」(口語訳)

- ① 写本の違いが訳文の違いになっている。口語訳の写本が一番よい。
- ② 「Ignoring what they said,」(NIV)
- ③ 無視するとは、聞こえてきたが、関心を示さないということ。

(2) 無視することについて

① 箴4:14~15

「悪者どもの道に入るな。悪人たちの道を歩むな。それを無視せよ。そこを通るな。それを避けて通れ」

② 箴8:33

「訓戒を聞いて知恵を得よ。これを無視してはならない」

(3) 「恐れなくて、ただ信じていなさい」

- ① これは、会堂管理者へのことばである。
- ② 会堂管理者は、長血の女の癒しを目撃した。
- ③ それによって、イエスに対する信仰が強められた。
- ④ イエスは、彼の信仰を励ましたのである。
- ⑤ 彼もまた、信仰の訓練を受けている。

2. 37節

「そして、ペテロとヤコブとヤコブの兄弟ヨハネのほかは、だれも自分といっしょに行くのをお許しにならなかった」

(1) 3人の弟子だけが同行を許された。

- ①ペテロ、ヤコブ、ヨハネ
- ②3人の証人を立てている。

(2) その場に残された人たち

- ①弟子たち9人
- ②群衆

II. 泣き叫ぶ人々へのことば(38~40節)

1. 38~39節

「彼らはその会堂管理者の家に着いた。イエスは、人々が、取り乱し、大声で泣いたり、わめいたりしているのをご覧になり、中に入って、彼らにこう言われた。『なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです』」

(1) ヤイロの家は喧噪で満ちていた。

- ①泣き女たちが仕事をしていた。
- ②裕福な人の家では、大ぜいの泣き女を雇っていた。
- ③交互に泣き声を上げることもあった。

(2) 「なぜ取り乱して、泣くのですか。子どもは死んだのではない。眠っているのです」

- ①これは、泣き叫ぶ人々へのことばである。
- ②イエスは、少女がこん睡状態にあると言っているのではない。
- ③また、肉体の死と復活の間、魂は眠りの状態にあると教えているわけでもない。
- ④観察者の目から見て、彼女は蘇生するので、眠りから覚めたような状態になる。

2. 40節

「人々はイエスをあざ笑った。しかし、イエスはみんなを外に出し、ただその子どもの父と母、それにご自分の供の者たちだけを伴って、子どものいる所へ入って行かれた」

(1) 少女のいる部屋に入ったのは、少数の者であった。

- ①父と母

②3人の弟子たち

(2) この癒しは私的な空間で行われる。

①イエスのメシア性を証明する奇跡は、公の空間で行われた。

②ここでは、イエスは個人の信仰に答える形で奇跡を行っておられる。

Ⅲ. 死んだ少女へのことば(41～43節)

1. 41節

「そして、その子どもの手を取って、『タリタ、クミ』と言われた。(訳して言えば、「少女よ。あなたに言う。起きなさい」という意味である)」

(1) イエスは、死体に触れている。

①儀式的汚れの問題を解決している。

②死の問題も解決している。

(2) 「タリタ、クミ」

①これは、アラム語である。

②紀元1世紀の中東では、アラム語とギリシア語は、共通語であった。

③ヘブル語は、ユダヤ人の日常語であった(紀元3世紀頃まで)。

④それ以降、ヘブル語は日常語としての機能を失い、祈りの言葉となった。

⑤19世紀になって、エリエゼル・ベン・イエフダがヘブル語を復活させた。

⑥この時代のユダヤ人は、ヘブル語とアラム語を流暢に話せた。ギリシア語は、個人差があった。

⑦イエスと弟子たちはアラム語を話したとされてきた。

⑧しかし、当時の状況から判断すると、ヘブル語を中心に話したと考えられる。

(3) 少女の状態は、絶望でも、変更不可能でもない。

2. 42～43節

「すると、少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。十二歳にもなっていたからである。彼らはたちまち非常に驚きに包まれた。イエスは、このことをだれにも知らせないようにと、きびしくお命じになり、さらに、少女に食事をさせるように言われた」

(1) 12歳の少女

①結婚前の処女であろう。許嫁がいた可能性が高い。

②希望に満ちた将来が待っているだけに、その死はより一層悲劇的である。

- (2) 癒しは即座に行われた。
- ①少女はすぐさま起き上がり、歩き始めた。
 - ②彼らは仰天した。
 - *3人の弟子たち
 - *父と母
- (3) イエスの2つの命令
- ①沈黙せよとの命令
 - *誤った動機で人々がイエスに近づかないように。
 - ②少女に食事をさせよとの命令
 - *少女は死から健康体に戻った。
 - *これは復活の体とは異なる。
 - *食事によって維持される必要のある体である。

結論：

1. イエスの弟子訓練の総まとめ
 - (1) しるし
 - ①イスラエルへのしるしから、弟子たちへのしるしへの変化
 - (2) 奇跡
 - ①信仰のない大衆から、信仰のある個人への変化
 - ②宣伝から、沈黙への変化
 - (3) メッセージ
 - ①会堂や町々での宣言から、沈黙への変化
 - (4) 教え
 - ①明白な教えから、たとえ話による教えへの変化
2. 3人の弟子たちの訓練
 - (1) ペテロ、ヤコブ、ヨハネの3人は特別な訓練を受けた。

(2) マコ9:2

「それから六日たって、イエスは、ペテロとヤコブとヨハネだけを連れて、高い山に導いて行かれた。そして彼らの目の前で御姿が変わった」

(3) マコ 14 : 32～33

「ゲツセマネという所に来て、イエスは弟子たちに言われた。『わたしが祈る間、ここにすわっていなさい。』そして、ペテロ、ヤコブ、ヨハネをいっしょに連れて行かれた。イエスは深く恐れもだえ始められた」

(4) 十字架と復活の意味についての訓練

(5) 私的聖書解釈は無視すべきであるが、使徒たちの教えは無視すべきでない。

「ナザレ再訪問」

§ 068 マタイ 9 : 27~34

§ 069 マコ 6 : 1~6

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの公生涯は、弟子訓練の段階に入っている。
- ②きょうの箇所も、弟子訓練という文脈の中で読む必要がある。
- ③きょうは、2つのセクションを取り上げる。

(2) § 68 ふたりの盲人の癒しと口のきけない悪霊の追い出し

- ①マタイの福音書だけに出てくる。
- ②ベルゼブル論争の結論が、日常的に繰り返される。

(3) § 69 ナザレ再訪問

- ①マルコとマタイに出てくる。
- ②最初の訪問との相違点、類似点に注目しよう。

(4) A. T. ロバートソンの調和表

「ふたりの盲人の癒しと口のきけない悪霊の追い出し」 (§ 68)

マタイ 9 : 27~34

「ナザレ再訪問」 (§ 69)

マコ 6 : 1~6、マタイ 13 : 54~58

2. アウトライン

(1) ふたりの盲人の癒しと口のきけない悪霊の追い出し (マタイ 9 : 27~34)

- ①ふたりの盲人の癒し (27~31 節)
- ②口のきけない悪霊の追い出し (32~34 節)

(2) ナザレ再訪問 (マコ 6 : 1~6)

- ①会堂で教えるイエス (1~2 節 a)
- ②人々の反応 (2b~3 節)
- ③イエスの嘆き (4~6 節)

3. 結論 :

- (1) 証しの在り方
- (2) 弟子訓練の内容

イエスの弟子訓練について学ぶ。

くふたりの盲人の癒しと口のきけない悪霊の追い出し(マタ9:27~34) >

I. ふたりの盲人の癒し(27~31節)

1. 27節

「イエスがそこを出て、道を通って行かれると、ふたりの盲人が大声で、『ダビデの子よ。私たちがあわれんでください』と叫びながらついて来た」

- (1) 盲人にとっては、イエスは希望の源であった。
 - ①メシアが来られると、盲人の目が開かれるという信仰があった。
 - ②根拠になっている聖句は、イザ61:1である。
 - ③彼らの肉体の目は閉ざされていたが、霊の目は開かれていた。
- (2) 「ダビデの子」という呼びかけ
 - ①メシアのタイトルである。
 - ②マタ1:1
「アブラハムの子孫、ダビデの子孫、イエス・キリストの系図」
 - ③イエスがこのタイトルを用いることはなかった。
 - ④イエスは、「人の子」というタイトルを用いた。
 - ⑤彼らには、イエスをメシアと信じる信仰と、その信仰に基づく熱心さがあった。
- (3) イエスが彼らを見捨てていることに注目すべきである。
 - ①公の場での対話はない。

2. 28節

「家に入られると、その盲人たちはみもとにやって来た。イエスが『わたしにそんなことができるか』と言われると、彼らは『そうです。主よ』と言った」

- (1) その盲人たちが家に入ると、そこは私的空間となった。
 - ①そこで初めてイエスは彼らと対話された。
- (2) イエスは彼らの信仰を確認された。
 - ①パリサイ人たちがイエスを公に拒否する前は、信仰に関する質問はなかった。
 - ②拒否以降、イエスは癒しを求めて来る人の信仰を確認するようになった。
 - ③癒しを受け取る条件は、イエスをメシアとして信じる信仰である。

(3) 彼らは信仰を告白した。

- ①「そうです。主よ」
- ②「ナイ、キュリエ」
- ③ギリシア語の「キュリオス」は、イエスの神性を示す。

3. 29～30 節

「そこで、イエスは彼らの目にさわって、『あなたがたの信仰のとおりになれ』と言われた。すると、彼らの目があいた。イエスは彼らをきびしく戒めて、『決してだれにも知られないように気をつけなさい』と言われた」

(1) イエスによる癒し

- ①目にさわった。
- ②「あなたがたの信仰のとおりになれ」と言われた。
- ③癒しはただちに起こった。

(2) イエスの命令

- ①沈黙の命令
- ②これは、イエスの新しいポリシーである。

4. 31 節

「ところが、彼らは出て行って、イエスのことをその地方全体に言いふらした」

(1) 癒されたふたりの人は、イエスの命令に従わなかった。

II. 口のきけない悪霊の追い出し (32～34 節)

1. 32～33 節 a

「この人たちが出て行くと、見よ、悪霊につかれて口のきけない人が、みもとに連れて来られた。悪霊が追い出されると、その人はものを言った」

(1) これは、メシア的奇跡である。

2. 33b～34 節

「群衆は驚いて、『こんなことは、イスラエルでいまだかつて見たことがない』と言った。しかし、パリサイ人たちは、『彼は悪霊どものかしらを使って、悪霊どもを追い出しているのだ』と言った」

(1) 群衆は驚き、イエスは誰なのかと当惑した。

- ①メシア的奇跡を見たから。
- (2) パリサイ人たちは、冒流的な言葉を吐いた。
 - ①ベルゼブル論争の再現
 - ②ベルゼブル論争以降、この説明が頻繁に行われるようになっていた。

<ナザレ再訪問 (マコ6:1~6) >

I. 会堂で教えるイエス (1~2節 a)

1. 1~2節 a

「イエスはそこを去って、郷里に行かれた。弟子たちもついて行った。安息日になったとき、会堂で教え始められた

- (1) カペナウムからナザレへ
 - ①南西約30キロ
 - ②この訪問は、弟子たち全員を訓練するためのものでもある。
- (2) ナザレでの最初の拒否
 - ①ルカ4:16~30
 - ②公生涯の始まりに、故郷を訪問した。
 - ③人びとは、イエスのメシア宣言を拒否し、イエスを殺そうとした。
- (3) ナザレ再訪問
 - ①イエスの名声が広まった段階での訪問である。
 - ②イエスは、弟子たちを引き連れた高名なラビとして故郷を訪問した。
 - ③ナザレの人びとに再度チャンスが与えられた。
 - ④ナザレの人びとによる最終的な拒否が確定する。
- (4) イエスによる安息日の重視
 - ①教えの内容は、律法と預言者である。

II. 人々の反応 (2b~3節)

1. 2節 b

「それを聞いた多くの人々は驚いて言った。『この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか。この人に与えられた知恵や、この人の手で行われるこのような力あるわざは、いったい何でしょう』」

(1) 「この人は、こういうことをどこから得たのでしょうか」

- ①直訳は、「どこから、こいつに、こういうことが」
- ②ギリシア語では3語。「πόθεν τούτω ταῦτα」
- ③英語では、「Where did this man get all this?」 (RSV)
- ④軽蔑のニュアンスが込められている。

(2) 「この人に与えられた知恵や、この人の手で行われるこのような力あるわざは、
いったい何でしょう』

- ①イエスの知恵は否定していない。
- ②イエスが奇跡を行ったことも否定していない。
- ③彼らは、イエスの力には何かの仕掛けや裏があると怪しんだ。

2. 3節

「『この人は大工ではありませんか。マリヤの子で、ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモンの兄弟
ではありませんか。その妹たちも、私たちここに住んでいるではありませんか。』こう
して彼らはイエスにつまずいた」

(1) イエスの職業は大工である。

①ルカ9:62

「だれでも、手を鋤につけてから、うしろを見る者は、神の国にふさわしくあり
ません」

②マタ11:29

「わたしは心優しく、へりくだっているから、あなたがたもわたしのくびきを負
って、わたしから学びなさい。そうすればたましいに安らぎが来ます」

(2) 「マリヤの子」

- ①父親のヨセフの名は出ていない。恐らくすでに死んでいたのであろう。
- ②その場合でも、通常は父の名を出すものである。「ヨセフの子イエス」
- ③母親に問題のある子の誕生の例

*士11:1~2、ヨハ8:41、9:29 参照

④イエスの不自然な誕生が暗示されている。

(3) イエスの兄弟姉妹たち

①ヤコブ、ヨセ、ユダ、シモン

*ヤコブは、初代教会の指導者となった(使15:13~21 参照)。

*ヤコブの手紙の著者となった。

- ②姉妹たちは複数形なので、少なくとも2人以上いた。
 - ③イエスには、少なくとも6人の異父兄弟姉妹たちがいた。
 - ④これは、カトリックの教理(マリアの処女性)を否定する内容である。
- (4) 「こうして彼らはイエスにつまずいた」
- ①つい最近まで近所に住んでいた者が、預言者のように振る舞っている。
 - ②プライドが許さない。

III. イエスの嘆き (4~6 節)

1. 4 節

「イエスは彼らに言われた。『預言者が尊敬されないのは、自分の郷里、親族、家族の間だけです』」

- (1) イエスは自らを預言者の位置に置いている。
 - ①すでにメシア宣言は終わっているが、ここでは預言者として教えている。
- (2) それがナザレの人びとには受け入れられない。
 - ①ナザレは、イスラエルでは軽蔑されていた地である。
 - ②軽蔑されていた者たちが、イエスを軽蔑している。
 - ③偏見と不信仰の恐ろしさを思う。
- (3) イエスの格言
 - ①エリヤもバプテスマのヨハネも、親しい人たちからは拒否された。

2. 5~6 節

「それで、そこでは何一つ力あるわざを行うことができず、少数の病人に手を置いていやされただけであった。イエスは彼らの不信仰に驚かれた。それからイエスは、近くの村々を教えて回られた」

- (1) 少数の病人だけが癒された。
 - ①公生涯のこの段階では、信仰が癒しを受けるための条件になっている。
 - ②イエスは、彼らの不信仰に驚かれた。
- (2) イエスは、ナザレを去って近くの村々を教えて回られた。
 - ①再びナザレに戻ることはなかった。

結論：

1. 証しの在り方

- (1) 2人の盲人は、嬉しさのあまり、イエスのことをその地方全体に言いふらした。
- (2) イエスのポリシーは、沈黙すること。誤ったメシア理解を与えないためである。
- (3) 言い広めることではなく、イエスに従うことこそ真の感謝の表現である。
- (4) 証しをする際の吟味項目
 - ①自分の成功を自慢していないか。
 - ②聞く人に不快感を与えるような失敗談を披露していないか。
 - ③沈黙のタイミングに敏感か。
「愚か者でも、黙っていれば、知恵のある者と思われ、そのくちびるを閉じていれば、悟りのある者と思われる」(箴17:28)
 - ④イエス・キリストを通して父なる神をたたえているか。

2. 弟子訓練の内容

- (1) 12使徒を2人ずつにして派遣する時期が近い。
- (2) ナザレ再訪問には、12使徒全員が随行した。
- (3) そこで彼らは、御子イエスがナザレの人たちに拒否されるのを目撃した。
- (4) ナザレはイスラエル全体の型である。
 - ①イスラエルが最終的にメシアを拒否するのは、ヨハ11:45~54である。
「そこで彼らは、その日から、イエスを殺すための計画を立てた」(ヨハ11:53)
- (5) イエスの体験は、イエスに従う者たちの体験となる。
 - ①イエスが体験した孤独は、弟子たちの体験となる。
 - ②最も近い者たちから誤解されることは、弟子たちの体験となる。
- (6) 弟子たちに要求されるのは、成功することではなく、忠実であるということ。
- (7) **ピリ2:6~9**
「キリストは神の御姿である方なのに、神のあり方を捨てられないとは考えず、ご自分を無にして、仕える者の姿をとり、人間と同じようになられました。人としての性質をもって現れ、自分を卑しくし、死にまで従い、実に十字架の死にまでも従われました。それゆえ神は、この方を高く上げて、すべての名にまさる名をお与えになりました」
- (8) **ピリ2:13**
「神は、みこころのままに、あなたがたのうちに働いて志を立てさせ、事を行わせてくださるのです」

「3度目のガリラヤ伝道(1)」

§070 マタ9:35~10:15

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの公生涯は、弟子訓練の段階に入っている。
- ②3度目のガリラヤ伝道では、弟子たちを2人一組にして、派遣している。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「3度目のガリラヤ伝道」(§70)

マタ9:35~11:1

(3) この箇所を7分割して学ぶ。

- ①使徒たちを派遣する必要性(9:35~10:4)
- ②使徒たちへの具体的指示(10:5~15)
- ③迫害への警告(10:16~23)
- ④拒否への警告(10:24~33)
- ⑤拒否の結果(10:34~39)
- ⑥信じる者への報い(10:40~42)
- ⑦結語(11:1)

2. アウトライン

<使徒たちを派遣する必要性>(9:35~10:4)

- (1) 羊飼いのいない羊
- (2) 12使徒の派遣

<使徒たちへの具体的指示>(10:5~15)

*5つある。

3. 結論:

- (1) 「時代の精神」について
- (2) 具体的指示の現代的適用について

12使徒の派遣について学ぶ。

<12使徒を派遣する必要性> (9:35~10:4)

I. 羊飼いのいない羊 (9:35~38)

1. 35節

「それから、イエスは、すべての町や村を巡って、会堂で教え、御国の福音を宣べ伝え、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやされた」

(1) メシアの3つの働き

- ①教えた。教育である。
- ②御国の福音を宣べ伝えた。宣教である。
- ③病気をいやされた。医療である。

2. 36節

「また、群衆を見て、羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた」

(1) 訳語の比較

「また、群衆を見て、羊飼いのいない羊のように弱り果てて倒れている彼らをかawaiiそうに思われた」(新改訳)

「また、群衆が飼主のいない羊のように弱り果て、打ちひしがれているのを見て、深く憐れまれた」(新共同訳)

「また群衆が飼う者のない羊のように弱り果てて、倒れているのをごらんになって、彼らを深くあわれまれた」(口語訳)

(2) 群衆の様子

- ①羊飼いのいない羊
- ②弱り果てて倒れている。打ちひしがれている。

(3) イエスの反応

- ①かawaiiそうに思われた。深く憐れまれた。
- ②ギリシア語では「スプランクニゾマイ」。はらわたが痛くなるという意味。

3. 37~38節

「そのとき、弟子たちに言われた。『収穫は多いが、働き手が少ない。だから、収穫の主に、収穫のために働き手を送ってくださるよう祈りなさい』」

(1) 現状

- ①収穫は多い。
- ②指導者たちはイエスを拒否していたが、民衆レベルでは信じる者が起こされて

いたということ。

③収穫のための働き手が少ない。

(2) 祈り

①「**収穫の主**」とは父なる神。

②「**働き手を送ってください**」という祈りを捧げる。

③人は、神から派遣されなければ働き手となることはできない。

④12使徒の派遣は、この祈りの結果である。

II. 12使徒の派遣(10:1~4)

1. 1節

「イエスは十二弟子を呼び寄せて、汚れた霊どもを制する権威をお授けになった。霊どもを追い出し、あらゆる病気、あらゆるわずらいをいやすためであった」

(1) 弟子から使徒へ

①弟子とは、師から学ぶ者。

*ユダヤ的文脈では、ラビに従う「タルミディム」である。

②使徒とは、派遣された者。

*遣わす者の代理人である。

(2) 使徒たちには、イエスが持っていたのと同じ権威が付与された。

①悪霊を追い出す力

*悪霊の追い出しをしていたユダヤ人はいたが、弟子たちにその権威を与えたのはイエスだけである。

②病をいやす力

2. 2~4節

「さて、十二使徒の名は次のとおりである。まず、ペテロと呼ばれるシモンとその兄弟アンデレ、ゼベダイの子ヤコブとその兄弟ヨハネ、ピリポとバルトロマイ、トマスと取税人マタイ、アルパヨの子ヤコブとタダイ、熱心党员シモンとイエスを裏切ったイスカリオテ・ユダである」

(1) 2人一組で派遣された。

①名前が並んでいる順番に一組になったのであろう。

(2) イスカリオテのユダ

- ①彼にも他の使徒たちと同じ権威が与えられた。
- ②彼は、イエスの教えと御業に触れただけでなく、自らその権威を行使した。
- ③その彼が、後にイエスを裏切るようになるとは、全く不可解である。

<使徒たちへの具体的指示> (10:5~15)

I. ユダヤ人だけに語る。

1. 5~6節

「イエスは、この十二人を遣わし、そのとき彼らにこう命じられた。『異邦人の道に行ってはけません。サマリヤ人の町に入ってはけません。イスラエルの家の失われた羊のところに行きなさい』」

- (1) この段階では、ユダヤ人伝道だけが行われる。
 - ①伝えるメッセージは、十字架の福音ではない。
 - ②天の御国の福音は、契約の民だけに向けられたものである。
- (2) サマリヤ人も異邦人も除外された。
 - ①マタ28章になって、ようやく異邦人が伝道の視野に入る。
 - ②弟子たちに、大宣教命令が与えられた。

II. 天の御国の福音を語る。

1. 7節

「行って、『天の御国が近づいた』と宣べ伝えなさい」

- (1) 伝えるべきメッセージは、「天の御国が近づいた」というものである。
 - ①バプテスマのヨハネのメッセージと同じ。
 - ②イエスのメッセージとも同じ。
- (2) 天の御国の福音とは何か。
 - ①イエスは、イスラエルの王として来られた。
 - ②イエスは、タナハ(旧約聖書)が預言するメシアである。
 - ③この方をメシアとして受け入れたなら、メシア的王国は成就する。
 - ④もしユダヤ人たちがイエスを受け入れていた場合はどうなっていたか。
 - *聖書は沈黙している。
 - *イエスはローマに逮捕され、やはり十字架にかかっていたであろう。

2. 8節

「病人をいやし、死人を生き返らせ、ツアラアトに冒された者をきよめ、悪霊を追い出しなさい。あなたがたは、ただで受けたのだから、ただで与えなさい」

(1) イエスは使徒たちに権威を与えた。

①使徒たちが行う奇跡は、彼らが伝えるメッセージの信憑性を保証した。

III. 旅の費用を心配する必要はない。

1. 9～10節

「胴巻に金貨や銀貨や銅貨を入れてはいけません。旅行用の袋も、二枚目の下着も、くつも、杖も持たずに行きなさい。働く者が食べ物を与えられるのは当然だからです」

(1) マコ6:8

「また、彼らにこう命じられた。『旅のためには、杖一本のほかは、何も持って行ってはいけません。パンも、袋も、胴巻に金も持って行ってはいけません』」

①マタイとルカは、余分なものを持って行くなと教えている。

②マルコは、すでに持っているもの以外のものは持って行くなと教えている。

(2) 働き人には、神が必要なものを備えてくださる。

IV. ふさわしい人の家に泊まれ。

1. 11節

「どんな町や村に入っても、そこでだれが適当な人かを調べて、そこを立ち去るまで、その人のところにとどまりなさい」

(1) 宿はどうするのか。

(2) 「適当な人」

①新共同訳と口語訳では、「ふさわしい人」。

②ギリシア語では、「アクシオス」。

③英語では「worthy」。

④使徒たちを迎えるにふさわしい人という意味。

⑤その人は、天の御国の福音を信じる人である。

⑥その人は、使徒たちに仕える特権に与る。

2. 12～13節

「その家に入るときには、平安を祈るあいさつをきなさい。その家がそれにふさわしい家なら、その平安はきっとその家に来るし、もし、ふさわしい家でないなら、その平安はあなたがたのところに戻って来ます」

(1) 祝福の祈り

- ①ふさわしい家なら、祝福はその家に来る。
- ②ふさわしい家でないなら、祝福は使徒たちに返って来る。

V. 不信仰の場を去る時は、足のちりを払い落とせ。

1. 14節

「もしだれも、あなたがたを受け入れず、あなたがたのことばに耳を傾けないなら、その家またはその町を出て行くときに、あなたがたの足のちりを払い落としなさい」

(1) 劇的な表現

- ①彼らは使徒たちを拒否した。
- ②それは、彼らを遣わしたメシアを拒否したことである。
- ③メシアもまた、彼らを拒否された。

2. 15節

「まことに、あなたがたに告げます。さばきの日には、ソドムとゴモラの地でも、その町よりはまた罰が軽いのです」

(1) 不信仰な町々と、ソドムとゴモラが対比される。

- ①メシアの使徒たちを目撃したのに、不信仰に留まる罪は大きい。

結論：

1. 時代の精神について

(1) どの国にも、「時代の精神」というものがある。

- ①日本の歴史でも、同じことが言える。
- ②それは、政治、経済、社会体制などによって規定されるが、それだけではない。
- ③それは、無意識的に「内発的」でもある。

(2) 「羊飼いのない羊のよう」とは、時代の精神である。

- ①イエスが登場する直前の時代の精神は、「メシア待望」であった。
- ②イエスが登場して以降、民衆は混乱に陥った。
- ③どの指導者に従えばいいのか、分からなくなったのである。
- ④ラビたちは、そのほとんどがイエスを拒否した。
- ⑤しかし、民衆はまだそこまでは行っていなかった。信じる者が起こされていた。
- ⑥後になって、民衆もイエスを拒否するようになる。
- ⑦民衆は、それぞれが自分の判断で行動していた。

⑧国家的混乱が、「時代の精神」である。

(3) イエスはそれを憐れんで、使徒たちは派遣された。

①天の御国の福音を信じるのが、救われる方法であった。

(4) 日本における「時代の精神」とはなにか。

①それぞれの時代に、「時代の精神」というものがあつた。

②戦国時代の後に、日本が統一されたことは、大いなる悲劇でもあつた。

* 権威(お上)が、思想と信仰の自由を束縛した。

* キリシタン禁教令は、その最大の例である。

* 民衆がキリスト教を拒否したのではなく、権威がそれを行ったのである。

③キリスト教は邪宗門であるという理由なき認識が、江戸時代の「時代の精神」となつた。

④日本を統治する権威は幕末以降変化してきたが、日本古来の「時代の精神」と江戸時代に醸成された「時代の精神」とは、そのまま生き延びてきた。

* 日本は天皇を祭司とする神の国である。

* キリスト教は排除すべき宗教である。

⑤現在の日本の「時代の精神」は、混乱である。

* 勝利主義的国家観が再び台頭しつつある。

* 大震災以降、悲観的国家観を共有する人たちが増えてきている。

* 多くの若者が、将来への希望を見い出せなくなっている。

(例話)「半沢直樹」(視聴率42.2パーセント)

(5) このような「時代の精神」に対して、御国の大使として派遣される必要がある。

①使徒たちの派遣は、他人ごとではない。

②働き人を送ってくださいとの祈りは、自らが働き人となるという決断を迫る。

③献身の形態を狭く捉えてはならない。

* フルタイムの献身は尊いことである。

* しかし、万人祭司の教えを思い出すべきである。

* 自給伝道には、大きな可能性がある。

2. 具体的指示の現代的適用について

(1) この文脈で語られたことを、そのまま私たちに適用することはできない。

①生活の準備をしないで宣教地に向かう宣教師はいない。

(2) ただし、普遍的原則は適用できる。

①異邦人にもユダヤ人にも、福音を語る。

②イエス・キリストの福音を語る。

③余計なものを人生のゴールとしない。

④信仰の友を同労者とする。

*奉仕し、奉仕される関係

⑤拒否されることを恐れない。

「3度目のガリラヤ伝道(2)」

§070 マタ10:16~33

1. はじめに

(1) 文脈の確認

- ①イエスの公生涯は、弟子訓練の段階に入っている。
- ②3度目のガリラヤ伝道では、弟子たちを2人一組にして、派遣している。

(2) A. T. ロバートソンの調和表

「3度目のガリラヤ伝道」(§70)

マタ9:35~11:1

(3) この箇所を7分割して学ぶ。

- ①使徒たちを派遣する必要性(9:35~10:4)
- ②使徒たちへの具体的指示(10:5~15)
- ③迫害への警告(10:16~23)
- ④拒否への警告(10:24~33)
- ⑤拒否の結果(10:34~39)
- ⑥信じる者への報い(10:40~42)
- ⑦結語(11:1)

2. アウトライン

(3) 迫害への警告(10:16~23)

- ①状況認識
- ②神の計画の認識
- ③迫害の原因の認識

(4) 拒否への警告(10:24~33)

- ①原則
- ②イエスと同じ理由で迫害される。
- ③しかし、恐れてはいけない。
- ④イエスを告白せよ。

3. 結論:重要な4つの聖句の適用

12使徒の派遣について学ぶ。

I. 迫害への警告(10:16~23)

1. 状況認識

「いいですか。わたしが、あなたがたを遣わすのは、狼の中に羊を送り出すようなものです。ですから、蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい」(16節)

(1) 宣教への派遣は、観光旅行ではない。

① 宣教地は、戦場である。

② キリストの兵士としての心構えが必要となる。

(2) 「狼の中に羊を送り出すようなもの」

① 狼とは、キリストに敵対する人たちである。

② マタ7:15

「にせ預言者たちに気をつけなさい。彼らは羊のなりをしてやって来るが、うちは食欲な狼です」

(例話) イスラエルのネタニヤフ首相(10月1日の国連総会での一般討論演説)

「核開発について言えば、アフマディネジャド(前大統領)がオオカミの衣をまとったオオカミだったのに対し、ロハニは羊の皮をかぶったオオカミだ」

(3) 「蛇のようにさとく、鳩のようにすなおでありなさい」

① 蛇のようにさとくとは、危険を避ける知恵のこと。

② 鳩のようにすなおとは、敵に害を与えないこと。

*ギリシア語で「アケライオイ」。

*英語で「harmless」。

*混じりけがないということ。

*人格と信仰による勝利

2. 神の計画の認識(17~20節)

(1) 預言的警告

「人々には用心しなさい。彼らはあなたがたを議会に引き渡し、会堂でむち打ちますから。また、あなたがたは、わたしのゆえに、総督たちや王たちの前に連れて行かれます。それは、彼らと異邦人たちにあかしをするためです」(17~18節)

① この部分は、教会設立以降の宣教に関する教えである。

② 使5:40

「使徒たちを呼んで、彼らをむちで打ち、イエスの名によって語ってはならない
と言い渡したうえで釈放した」

- ③「人々」とは、イエスを拒否するユダヤ人たち。
- ④「総督たちや王たち」とは、異邦人の支配者たち。
- ⑤迫害の目的は、「あかしをするため」である。
- ⑥これが神の視点である。

(2) 預言的励まし

「人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配する
には及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです。というのは、話す
のはあなたがたではなく、あなたがたのうちにあって話されるあなたがたの父の御霊
だからです」(19～20節)

- ①父の御霊(聖霊)が話すべき言葉を与えてくれる。
- ②その結果、イエスの弟子たちは解放される。

3. 迫害の原因の認識(21～23節)

(1) 裏切りへの備え

「兄弟は兄弟を死に渡し、父は子を死に渡し、子どもたちは両親に立ち逆らって、彼
らを死なせます。また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれま
す。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます」(21～22節)

- ①迫害が激しくなると、兄弟間、親子間の裏切りに至る。
- ②迫害の原因は、「キリストの名のため」である。
- ③弟子たちを憎んだのは、キリストを憎んだことである。

(2) 移動への備え

「彼らがこの町であなたがたを迫害するなら、次の町にのがれなさい。というわけは、
確かなことをあなたがたに告げるのですが、人の子が来るときまでに、あなたがたは
決してイスラエルの町々を巡り尽くせないからです」(23節)

- ①時間は限られている。
- ②「人の子が来るときまで」とは、イエスのエルサレム入城の時であろう。

II. 拒否への警告(10:24～33)

1. 原則

「弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません」(24節)

(1) 弟子たちの当惑を予想して、語っている。

①メシアの弟子がなぜ苦難に会うのか。

(2) 弟子たちはイエスと同じ道を歩む。

①弟子は、師よりも勝っていない。

②しもべは、主人よりも勝っていない。

2. イエスと同じ理由で拒否される。

「弟子がその師のようになれば十分だし、しもべがその主人のようになれば十分です。彼らは家長をベルゼブルと呼ぶぐらいですから、ましてその家族の者のことは、何と呼ぶでしょう」(25節)

(1) イエスは、ベルゼブルによって悪霊を追い出していると言われた。

①弟子たちも、同じ理由で拒否される。

②イエスは家長であり、弟子たちは家族の者である。

3. 恐れではいけない。

「だから、彼らを恐れてはいけません。おおわれているもので、現されないものはなく、隠されているもので知られずに済むものはありません。わたしが暗やみであなたがたに話すことを明るみで言いなさい。また、あなたがたが耳もとで聞くことを屋上で言い広めなさい。からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい。二羽の雀は一アサリオンで売っているでしょう。しかし、そんな雀の一羽でも、あなたがたの父のお許しなしには地に落ちることはありません。また、あなたがたの頭の毛さえも、みな数えられています。だから恐れることはありません。あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です」(26～31節)

(1) 恐れる必要はない。

①むしろ、個人的にイエスから聞いたことを公に言い広める。

(2) 恐れなくともいい理由

①彼らは、からだを殺しても、たましいを殺せない。

②恐るべきは、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方。

*これは、畏怖の恐れである。

③天の父は、雀の一羽でも守っておられる。

*2羽1アサリオン(銅貨)

④「あなたがたは、たくさんの雀よりもすぐれた者です」

⑤頭の毛さえも、みな数えられている。

4. イエスを告白せよ。

「ですから、わたしを人の前で認める者はみな、わたしも、天におられるわたしの父の前でその人を認めます。しかし、人の前でわたしを知らないと言うような者なら、わたしも天におられるわたしの父の前で、そんな者は知らないと言います」(32~33節)

(1) 「認める」とは、告白することである。

①ギリシア語で「ホモロゲオウ」である。

②英語で「confess」である。

③恥ずかしく思わないということである。

④その究極的な形が、殉教の死である。

(2) 地上でイエスを告白するかどうか、次の世の運命を決する。

①イエスを告白するなら、イエスは天の父の前でその人を信者と認めてくださる。

②イエスを拒否するなら、イエスは天の父の前でその人を拒否される。

③12使徒の中で、イスカリオテのユダだけがイエスを拒否した。

結論：

1. マタ 10 : 19

「人々があなたがたを引き渡したとき、どのように話そうか、何を話そうかと心配するには及びません。話すべきことは、そのとき示されるからです」

(1) 極端な適用はよくない。

(2) 事前に説教の準備をする必要はないというのは、誤りである。

(3) この聖句は、今日の私たちには無関係であるというのも誤りである。

2. マタ 10 : 22

「また、わたしの名のために、あなたがたはすべての人々に憎まれます。しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます」

(1) これは、業による救いを教えているのではない。

(2) エペ 2 : 8~9

「あなたがたは、恵みのゆえに、信仰によって救われたのです。それは、自分自身から出たことではなく、神からの賜物です。行いによるものではありません。だれも誇る事のないためです」

(3) 最後まで耐え忍ぶ者は、肉体の命が守られるという意味でもない。

(4) 忍耐は、真に救われていることの証拠である。

(5) マタ 24:13

「しかし、最後まで耐え忍ぶ者は救われます」

- ①大患難時代のレムナント(ユダヤ人信者)
- ②使徒たちは、大患難時代のレムナントの型となっている。

3. マタ 10:24

「弟子はその師にまさらず、しもべはその主人にまさりません」

(1) イエスは、自分が経験していないことを弟子たちに押し付けることはない。

(2) ヘブ 4:15

「私たちの大祭司は、私たちの弱さに同情できない方ではありません。罪は犯されませんでしたでしたが、すべての点で、私たちと同じように、試みに会われたのです」

4. マタ 10:28

「からだを殺しても、たましいを殺せない人たちなどを恐れてはなりません。そんなものより、たましいもからだも、ともにゲヘナで滅ぼすことのできる方を恐れなさい」

- (1) 肉体の死は、クリスチャンにとっては最大の悲劇ではない。
- (2) 死はキリストとともにいることである。今の状態よりもはるかによい。
- (3) 罪、病、悲しみ、苦難からの解放である。
- (4) 永遠の栄光への移行である。
- (5) 事実、死はクリスチャンに起こる最高の祝福である。